

# 伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇二四年 第一〇四号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二四年 第一〇四号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.104 2024





## 伊能忠敬記念館所蔵

## 「佐渡国沿海全図」部分

国宝・地図・絵図類 89

無断流用禁止

去る七月二十七日に「佐渡の金山」が世界文化遺産に登録されたが、伊能忠敬は世界遺産の構成資産である「西三川砂金山」と「相川鶴子金銀山」の両方を訪れているので紹介したい。

佐渡に滞在したのは第四次測量も終盤の享和三（一八〇三）年八月二十六日に小木湊に上陸してから、九月十七日に小木湊を出航するまでである。

八月二十八日から佐渡の手分け測量が始まった。平山郡蔵隊が小木湊から新町までの海岸線を進み、その途中で西三川村を測量した。忠敬は測量せずに岡道を進み、西三川村を通過した。忠敬は西三川村について、村高二百八十九石九斗一升五合、家は三十三軒と記録している。西三川は中世末期から砂金採掘で知られていた。明治五年に閉山してからは砂金流し用水路を農業用水路へ転用するなどして形成された地域の歴史の変遷を示す文化的景観が高く評価され、国の重要な文化的景観に指定されている。

二十九日から忠敬隊が新町から相川までの海岸を測量し、両者は九月一日に相川で合流した。相川には佐渡奉行所が置かれていたので、翌日には佐渡渡海と測量御用の届けを提出するため佐渡奉行所に出向いた。そこで出会った取次広間役の平野仁左衛門とは蝦夷地測量の折りにビロオ（広尾）で対面したことがあった。

三日は「朝より晴曇、銀山一覽」と記しており、相川金銀山を見学している。相川金銀山では採鉱から選鉱、精錬から小判鋳造まで全工程を一貫しておこない、手工業段階での金生産システムの最高到達点と評価されている。

四日からの海浜手分け測量では、忠敬が佐渡島の南側を、平山郡蔵が北側を担当して、十三日には測量を終えた。

「佐渡国沿海全図」は縮尺36000分の1、縦174・8×110・9cm。文化元年（1804）年に作製され、將軍家斉が上覧した六九枚からなる日本東半部沿海地図の大図の控図の一枚である。

この大図は相川出身の石井静蔵（夏海）によって写本「佐渡三寸六分壹里之図」が作られ現存している。文化八年に勘定吟味役から佐渡奉行となった金沢瀬兵衛（千秋）から、佐渡奉行所による『佐渡志』編纂のために、伊能勘解由製作絵図が石井静蔵に下げ渡された。それを自分用の控えとして写したもので、天保国絵図を改訂する際にも利用された。

詳しくは鈴木純子会員の「伊能図はどう利用されたかその1」（会報65号）を参照されたい。

玉造 功

## 表紙題字は伊能忠敬の筆跡



「佐渡国沿海全図」から西三川村の部分

## 目次

104号

## 表紙解説

伊能忠敬記念館所蔵

佐渡国沿海図

玉造 功

●「伊能忠敬笹山領探索の会」に

国土地理院長から感謝状贈呈

1

## 研究と活動

●伊能忠敬の未公表書簡（五）

●第1次測量の大図と下図

前田幸子  
玉造 功

12 2

## 資料

●「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

連載第三十七回 渡辺一郎・井上辰男

22

## 忠敬談話室

●その悦び 知るべし

●伊能図と地図投影法

戸村茂昭  
菱山剛秀

48 44

●国宝紹介 自江戸歴尾尾州赴北国到奥州沿海図  
第二十二（自酒田／至本荘）

玉造 功

52

各地のニュース・会員だより・お知らせ

忠敬旧宅五句

伊能 洋

佐原の伊能家天文台

玉造 功

55

NHKの民謡番組に忠敬先生が出演

戸村茂昭

55

第57回地図展2024金沢 室山孝・河崎倫代

57

吉岡伊能像視察研修

中塚徹朗

59

くはこだて検定合格者の会

門脇利勝

60

新入会員自己紹介

門脇利勝

60

お知らせ

60

## 「伊能忠敬笹山領探索の会」に 国土地理院長から感謝状贈呈

6月3日は「測量の日」である。これは現在の測量法が昭和24年6月3日に公布され、平成元年に満40年を迎えたことを機に、6月3日を「測量の日」と定めたことによる。また、「測量の日」にあわせて、測量・地図に関する普及・啓発に顕著な功績のあった個人又は団体に対し、国土地理院長から感謝状が贈呈されており、伊能忠敬研究会も令和4年度にその栄に浴している。

令和6年度の功労者として、「伊能忠敬笹山領探索の会」(会長は伊能忠敬研究会会員の加賀尾宏一氏)が選ばれ、6月14日に国土交通省において国土地理院長から感謝状が贈られた。



大木章一国土地理院長から加賀尾宏一氏に感謝状贈呈  
国土地理院提供

【贈呈理由】  
伊能忠敬笹山領探索の会は、「伊能忠敬笹山領測量」の史実を研究するため平成23年に結成し活動を開始した。

平成24年からは地域の小学校や、団体から依頼を受け、毎年出前教室を開催し、伊能忠敬を通して学校教育、社会教育へ貢献されている。

また、伊能図を使用した展示イベントを開催し、測量について普及啓発を行われているほか、笹山領内の要所12箇所に標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」を建立し、測量の道を歩く会などを開催するなど歴史街道を活かした豊かな地域づくりを行っている。

このような取組は測量や地図の普及・啓発に多大な貢献をされており、その功績は極めて大きい。



感謝状 加賀尾宏一会員提供

おめでとう

「伊能忠敬笹山領探索の会」会長 加賀尾宏一さん  
代表理事 堀野正勝

6月3日「測量の日」に当たり、「伊能忠敬笹山領探索の会」(会長 加賀尾宏一氏)へ、国土地理院長感謝状が授与されました。誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

授賞の背景は、前述の通りなので、重ねて申し上げるまでもありませんが、伊能忠敬の顕彰活動を長きにわたって行われたことで、実に素晴らしい、心から敬意を表します。

伊能忠敬の笹山測量の道などを通して、地域における学校教育や社会教育の発展に多大な貢献をされたその功績は誠に顕著です。

この度の感謝状の授賞は伊能忠敬研究会にとっても、誠に名誉なことと思います。

加賀尾会員に置かれましては、これからも、健康に留意され、末永く、研究会活動が続けられますよう心より祈念いたします。

改めて、国土地理院長感謝状の授賞おめでとうございます。

丹波新聞の7月7日の記事から

伊能忠敬笹山領探索の会は活動に一区切り着いたとして今年3月末で解散。これまでの活動をたたえ、ねぎらうかのように贈られた感謝状に、加賀尾会長は、「身に余る光栄」と喜ぶ一方で、「伊能忠敬が測量した丹波の道には、まだまだ未知の発見があるだろう。新たに活動が引き継がれていく方策も考えていかなくては」と思案している。

## 伊能忠敬の未公表書簡（五）

前田 幸子

はじめに

今回は前回99号に引き続き第五次測量時の書簡から、第十四書簡を取り上げる。この書簡は「増員願」として知られているもので「未公表」書簡ではないが、忠敬研究にとつて重要な書簡とされながら全文を紹介した例は少ない。本稿では忠敬からの書簡と、それに対する高橋景保の返信書簡を『高橋御用日記』（以下、『御用日記』）から抜粋して掲載する。高齢の忠敬（60）が遠国の測量現場から過酷な実情を訴え、若年の景保（20）が江戸に居て幕府上層との折衝に奮闘する、臨場感あふれる往復書簡である。

### 三度の増員願

本書簡は「増員願」として知られているが、「御用日記」を読むと、実はこの書簡の前便も「増員願」であった。文化二年閏八月京都発の書簡が「増員願」の第一便で、西国測量の過酷さを訴え、四、五人の増員を要求している。これに景保は「六人増員で大手分け」もしくは「一旦帰府」を提案、それに対して忠敬が「大増員でも大手分は不可」と所見を述べたのがこの第十四書簡である。最終的に景保は十月二十六日付で「中国測量終了後に、一旦帰府せよ（増員なし）」という若年寄の命令を忠敬に送った。しかし、その直後にも忠敬は窮状を訴え、三度目の「増員願」を出して一、二名の増員を申請したのである。その結果、門倉隼太と尾形慶助の二名が現地へ派遣されることとなった。

ちなみに「病氣」で帰府した下役の市野金助については、交代要員として下役の下河辺政五郎が派遣された。一方、供侍として参加していた内弟子の門谷清次郎は父の大病により市野と共に帰府したが、交代要員の派遣はなく、下僕の佐藤伊兵衛を供侍に仕立てて済まされた。結局、忠敬は三度の「増員願」を申請したが、増員されたのは差引き一名だけであった。

### 往復書簡の経過

※各書簡の原文等は後掲

#### 忠敬「西国測量二付増員願」

A書簡

文化二年閏八月付（「測量日記」閏八月七日出）

※景保・同月二十三日受領（京都代官便）

内容「西国は海岸線が複雑で当初の予定より大幅に超過する。病人も出て手分け測量も難しい。手伝いを四、五人増員してもらいたい。」

#### 景保「西国測量二付増員願」への返信

B書簡

文化二年九月一日付

※忠敬・同月二十日受領

内容「もし増員の許可が出たら六人ほど大増員し、中に東島平橋（佐賀藩士）のように象限儀を所蔵する者も加えて大手分をし、もし許可が出なかったら現在の人員で中国筋海辺の測量を了えて一旦江戸に帰り、英気を養って再度出張するのが良からう。（大谷亮吉著『伊能忠敬』の記述による）

#### 忠敬「増員願」（第十四書簡）

文化二年九月二十二日付

※景保・十月四日受領

内容（次頁以降に詳述。）

#### 景保「増員願」（第十四書簡）への返信

C書簡

文化二年十月二十六日付

※忠敬・十一月二十九日受領  
内容「以前から申請していた測量御用の件、本日申請の通り中国筋を残らず測量し、それが済んだらひとまず帰府するようにとの摂津守殿からの御命令があったので伝達する。」

\*\*\*\*\*

### 測量日記

※関係部分のみ抄出

文化二年（一八〇五）

八月二十六日 門谷は市野と共に帰府に付て、僕、伊兵衛を侍に致し手伝いにす。  
二十九日 市野金助病氣に付、帰府出立も届、此日八ツ後市野金助、門谷清治、小者三治当所出立。

閏八月七日 予は留守居を成。・・此日小堀中務役所幸便に暦局行書状を出す。

増人奉願候。

同 九日 彦根藩士大西順二来向。小堀役所より江戸幸便、序に暦局へ書状を頼。  
同十一日 大西順二膳所役人、即庄屋共来る。  
同十三日 京都出立。・大西順二、途中へ出る。  
同二十九日 大西順二来る。

九月六日 同夜大西順治来り国々測量付添之儀を談ず。

同二十日 此日途中へ大津宿より村継を以暦局より用状一封相届。

同二十一日 此日下河辺政五郎、小者栄治着。  
同二十二日 逗留。暦局行書状認。・御郡代役所へ相頼。

十一月二十九日 此日中食所へ暦局用状届。



## 第十四 年不詳

常月朔日御勘定所え御頼被遊彦根え御向御差出し被遊候尊前御勘定所より大津御郡代え御届の由大津宿役人より湖邊村繼を以彦根夫より湖邊相回工十日西湖遊雄琴村と申所之途中にて落常猶又下河邊氏山合拜讀仕候愈御安泰被遊御座奉恐喜候私共一同無異琵琶湖測量相濟昨日大津若仕候乍憚御安慮被遊可被下候

一湖水平測量の儀も先逃て奉申上候通東湖邊は行路七八分通は蘆葦生繁通路無之候に付無據戸腹際を引繩舟中にて湖中へ竹を指込方位を相測候依之田畑も人家も五町十町又は十五町二十町も相隔り芦葦にて一切不相分候に付其岡の山々又は里に上り麓圖も仕候得共船中引繩不密に奉存候間東湖邊は中山道又は越前街道え横繋等も仕候西湖邊は少し宜く候へ共矢張蘆葦にて岡に人家田畑相分り不中候所間々有之候來寅秋冬北國より又々大津竝大阪え琵琶湖越前就賀より手分仕東湖邊は越前街道本本宿より三四里湖邊の長濱彦根夫より朝鮮街道を中山道の守山宿へ出大津迄西湖邊は就賀より湖邊の北國海道を大津迄兩方共鐵鎖にて水道を相測可申奉存候左様仕候得ば東西共湖邊え近き景色形容も相分り地圖の仕立可宜奉存候湖水の義は別圖も相仕立候様被仰付候間成たけ相應に出來候様仕度奉存候

## 第十四 年不詳

## 現代語訳（大意）

今月一日に勘定所へ依頼し彦根へ向けて差し出された貴方様のお手紙は勘定所から大津郡代へ届いたとのこと。大津宿の役人から湖畔の村々へ村繼で彦根、それから湖畔を回送され、二十日に西岸の雄琴村という所へ向かう途中で入手しました。また、（※大津市教育委員会蔵版「下河邊氏へお渡し下された尊書、今月二十一日に大津宿にて」）下河邊氏に出会い拝読いたしました。ますますご安泰にお過ごしとのこと、お喜び申しあげます。私ども一同は無事に琵琶湖測量を済ませ、昨日大津に到着いたしました。どうぞご安心ください。

一、琵琶湖測量につきましては先日申し上げた通り、琵琶湖東岸の七、八割は蘆や葎が生い茂っていて通路がないので、やむを得ず芦や葎の生え際を引き縄測量し、船中から湖中に竹を差し込んで方位を測りました。このため、田畑からも人家からも五町十町または十五町二十町も隔たった芦蘆での測量となり、芦や葎で（周囲の地勢が）全く分かりませんので、近辺の陸地の山々あるいは人里に上陸して匱図を描きましたが、船中からの引き縄測量は精密ではないと思いますので、湖の東岸は中山道または越前街道の測線へ繋ぐなどの工夫も致しました。西岸は東岸よりは状態が少しよろしいのですが、やはり蘆や葎が茂っていて、陸上の人家や田畑が分からないところが間々あります。来年の寅年（文化三年）秋冬に北陸道から再度大津ならびに大阪へ行きました際に越前敦賀から手分け測量をいたし、湖の東岸は越前街道の本本宿から三、四里行った湖辺の長浜、彦根、それから朝鮮街道を通り中山道の守山宿へ出て大津まで、湖の西岸は敦賀から湖近辺の北国街道を大津まで、両方とも鉄鎖を使って街道を測ろうと思います。そのようにすれば琵琶湖の東岸西岸とも湖近辺の景色や地形が分かり、地図の仕立てができると存じます。琵琶湖につきましては別の図も仕立てるよう仰せつけられましたので、できるだけ相應の地図が出来上がるようにしたいと存じます。



一測量年數餘り相掛り候は付増人願の儀御伺申上候處早速御開濟被成下大手分等迄の儀被仰下同難有大悦仕候右に付篤と評談仕候處國々悉大手分測量仕候得共五ヶ年相掛り可申候處三ヶ年にも二ヶ年半にも相濟可申候得共推算下圖並圖取合仕上げ控圖にても年切に出来不仕候ては地圖を括形容忘却仕候て仕立に大差支に罷成候是迄年々一ヶ年限にて本圖仕立候願又は控圖仕候てさへ春の事は冬に成り差支有之難儀仕候依之當三月より當冬迄一ヶ年程の分は當時より越年迄に推算下圖粗書圖相加へ一ヶ年限の控仕圖立候て夫より新に測量相勤不申候て地圖混雜又は忘却仕候て大難儀仕候尤地圖仕立の儀は郡藏表立仕候間當人も年切に相調不申候ては急度混雜仕候て出来兼候段申候何様是迄四ヶ年其上にて或は翌春迄に仕上候得共地圖粗書圖組入には第一郡藏下拙迄も大に辛勞漸く間に合せ申候依之猶又衆評仕候所手分の義は瀬戸内之島々又は隠州と品海と淡路内外位に仕候て地圖仕立に第一に手分仕候方可宜奉存候紀州路大難所大日數相かかり其上病人等も出来仕候間推算下地圖は衆々申上候通一切に出来不申候間此上は當時之人数にても少々宛も下圖に取掛候様に可仕候増

一、測量の年数がかかりすぎるので（先般）増員願についてお伺いしたところ、早速聞き入れて頂いたうえ、大手分け測量等についてもご提案頂き、一同有難く大いに喜んでおります。右につき、とくと評議したところ、もし国々をすべて大手分で測量すれば、五年間かかるところを三ヶ年か二ヶ年半で済ませることができますが、測量結果の計算処理、下図作成、皴絵図（沿道風景の素描図）、各図の組合わせ、仕上げ作業、控え図作製（の一連の作業）を一年以内にやらないと、地圖を総括するのに必要な現地の形状を忘れてしまい、地圖仕立ての大きな支障となります。これまでは毎年、一年内に本図かまたは控え図を仕立ててきましたが、それでさえ春に測量した分の作業が冬までかかり、（記憶が薄れて）難儀しました。そういうわけでこの二月から当冬まで一ヶ年ほどの分は、今から越年までに推算、下図、粗書き図を加え、一年期限で控え図を仕立てて、それから新たに測量作業を開始するようにしないと地図（の記憶）が混乱、又は忘却してしまい、大いに難渋します。もともと地図の仕立ては（平山）郡藏が先頭に立ってやっておりますが、当人も地図はその年毎に調製しないと必ず混乱して出来ないと申しています。いかにも、これまで（第一次から第四次まで）の四年間、翌年春までに地圖を仕上げてきましたが、地圖の粗書図の組み合わせには郡藏のみならず私まで大いに苦勞し、やっと間に合わせておりました。それで、また皆で評議したところ、手分け測量は瀬戸内海の島々、隠岐国と北海、淡路国の周辺位にして地圖仕立てを第一に考え、手分けをするほうがよいと存じます。紀州路は大難所で日数がかかり、その上病人等も出たため、推算、下図作業はかねがね申し上げている通り、全くできませんでしたので、この上は現在的人数でも少しずつ下図作成に取りかかるように致します。



人願相叶候へは手分も出来地圖の仕立にも差支無之測量歳數も相減し歸國の上に地圖の惣括仕立も夫だけ手早く出来可仕候尤増人の義も格別大勢にも及中間敷柳原の子息又は慶助等に候はば四五人にて宜奉存候年々暮迄に和圖さへ仕上り申候へば五十日三十日位の手分は随分宜奉存候

一大手分等仕候は坂部氏手分頭取に仕候様に被仰下御尤は奉存候早速相談仕候處御賢慮の段有難奉存候へ共御証文の義一同一紙に被仰付候得ば四國九州等長に手分に相成候義は不承知にて何分下拙を同伴仕度旨を申候善子も御同様に御座候仍て下河邊氏別紙御証文御渡に候得ば自今測量御手練の上に別手の頭取に仕り郡蔵添可申と郡蔵へも内談仕候得共是も遠國御用四五年下拙に隨身介抱も仕候所猶又下拙年老を只今に相成半年一ヶ年百日連も相別候義は國元へも不相濟候旨を申候て承知不仕候彼是相考候處手傳の衆退屈又は病氣等も無之様一ヶ年も手早く相濟候義は一同所願に候得共餘り取急申候ては地圖仕上り惣括の所無覺束奉存候手分も五十日二十日位にて出會何角測量筋申合候様に仕候へば大に宜奉存候

もし増員願が叶えば手分け測量もでき、地圖の仕立てにも支障なく、測量にかかる年数も減り、帰国後の地図総括作業もその分手早くできます。もともと、増員は格別の大人数となつてはならず、柳(柳)原の子息か慶助等であれば四人でよろしいと存じます。毎年、年末までに控え図が仕上がるのであれば、五十日か三十日程度の期間の手分けならまあよろしいかと存じます。

一、大手分けて測量するのであれば坂部氏を手分け隊の隊長にするようにとのご提案は御尤もなものと存じます。早速、(坂部氏に)相談したところ、ご高配は有難く存じますが、御証文(無賃人馬の許可証)が(忠敬と)同一の紙面で仰せ付けられており(別行動は難しく)、四國・九州等を別隊として長期に手分け測量することには承知できません、何とか私(忠敬)と同行したいと申しております。(高橋)善助君も同様です。よって、下河邊氏に別紙御証文(下河邊単独の証文)をお渡しになられたので、今後の測量は測量技術が上達した上で(下河邊を)支隊の隊長にし、郡蔵を付き添わせるのはどうかと郡蔵にも内談しました。しかし郡蔵も遠國への測量御用で四、五年間私に随行して介助してきて、さらに私がますます年老いて現在に至っているので、半年、一年間、いや百日間でも私と離れて別行動になるのは、とても國元にも申し訳が立たないと申して承知しません。あれこれ考えましたが、手伝いの衆で嫌気がさしたり病氣にかかったりする者が出ないよう、一年でも早く測量が済むようにすることは一同が願う所ですが、あまりにとり急いでは地圖の仕上りの総括のところ覚束なく存じます。手分け測量も五日、十日、二十日位の短期間で出會つて合流するようにし、何かとこまめに測量結果を申し合わせるようにすれば、大変よろしいと存じます。



一増人願若し相叶不申候はば中國北國測量相濟  
一先歸府仕候て地圖相仕立候様被仰下承知仕候  
右の儀は一同に相願候處に御座候何様中國北國  
東海道中山道甲州街道相濟歸國仕候て地圖相仕  
立一同地圖手練にも相成候上再四國九州對馬壹  
岐等測量仕候儀大に宜奉存乍然兼々御賢慮の如  
く一ヶ年半も二ヶ年も遠國仕候て歸府後引續き  
無退屈一同再勤可仕候哉否の義は難計奉存候而  
増人被仰付候も不仰付候も天道次第奉存候何れ  
にも宜様に御執計被遊被下候様願上候尤増人被  
成下候へば何れにも年数は相減し地圖も手早に  
出来候様には急度相成申候宜御賢慮被下度候  
一増人之義東島平墟へ慶助差添一人柳原氏子息  
一人門倉準太事勘氣御赦免の上一人彦根の御家  
中大西順二賣算者相添一人<sup>是は門倉より</sup>其外にも  
御見立可被下候段御内々被仰下雖有奉存候扱東  
島は鎗格の仁に御座候哉又は鎗以下に御座候哉  
若し鎗供侍草履取等召連罷出候ては無益の人数  
計りおはく止宿にも差支猶又是迄大難所を御丹  
誠御手傳被成候御方よりも術理は不案内にて上  
格にも相見へ候ては連中一同和熟仕兼可申候大  
手別さへ不仕候へば別に象限儀無之候ても相濟  
可申候可相成候はば勘當差免の圭助一人計に仕

一、増員願の件がもし叶いませんでしたら、中国地方、北国街道の測量の終了後にいったん江戸に帰って地図を仕立てるようご下命があれば承諾いたします。そのことは隊員一同が願っているところであります。なるほど、中国、北国街道、東海道、中山道、甲州街道の測量を済ませて帰国して、地図を仕立てて、一同が地図作りに熟練した上で、再度四国、九州、対馬、壹岐などの測量をするのは大変よろしいと存じます。しかしながら、かねがねお考えのように、一年も二年も遠国へ行っていて、帰国後も引き続き嫌気が差すこともなく、一同が再度勤めることが出来るかどうかは推測しがたく存じますので、増員されるもされないもお任せいたしますので、いずれにも宜しきようにお取り計られますようお願い申し上げます。もつとも、増員してくだされば測量にかかる年数は減り、地図も手早く出来るように必ずなります。よろしくご検討下さいませようお願い致します。

一、増員の人选については、東島平墟（橋）へ慶助を（供として）付添わせて一人、柳（柳）原氏の子息一人、門倉準太は勘氣御赦免の上一人、彦根藩士の大西順二へ売算者を添えて一人（これは間長涯（重富）から先達でご内意あり）そのほかに（適任者を）お見立ていただき、内々仰せ下さいますと有難く存じます。さて、東島は鎗格の身分の方でしょうか。または鎗以下の身分でしょうか。もし鎗持ちや供侍や草履取り等を引き連れて来るのなら、役にたたない人数ばかり多くなり、止宿にも差し支えますし、かつまたこれまで大難所を懸命にお手伝いなされたお方よりも、測量術は未熟なのに格上に見えてしまうということでは、隊員一同の和が保てないといふべきでしょう。大手分け測量をしないのであれば、別に象限儀は無くても済みます。なるべくなら勘當（破門）を許して、圭（慶）助一人だけを参加させたいと存じます。



度候右様不相成候はば鎗も侍もなしに東島と慶助の外草履取計に仕度候間氏より兼々東島半人圭助一人右一人半を御積り被仰遣候得共東島は病身殊に懦弱に御座候得ば慶助一人前の處東島病氣其外にて二三分も隙取はせ慶助を漸一人の内六七分位に可仕哉と奉存候若し東島彌能越候様に相成候はば象限儀は下勘方のかげ合に持参仕候方宜奉存候

一、榊原氏子息の儀懽も少々山來候趣大に宜奉存候門倉準太義并癩之癖は御座候得共年來難澁も仕り人と相交り候間少は相直り可申候御勘氣御赦免被下置并癩の御意見被仰聞候はば随分可宜奉存候

一大西順二郎儀<sup>彦根家中御門人</sup>鈍才病身に御座候へ共年も可也實慮に相見へ申候間間氏御考の藏前賣算者相加へ一人前に仕候はば可宜奉存候乍然當月七日大西方より江戸御屋敷え勘解由隨身遠國測量仕度段願出候よし此節大津著迄に江戸屋敷願の義申越候等之處今日迄沙汰無御座候扱下拙へ隨身遠國仕度の段間氏え和頼京師著より相願候間増人願相叶其上淺草御役所増人都合間に合候はば随分淺草え相願可申候願も相叶不申候御役所にて人數都合も出來候はば致方無之段申候得ば其段は随分宜様に申候其慮に相任せ置候此

それができないのでしたら、槍持も供侍もなしにして東島と慶助以外は草履取りだけにしたいと思います。かねがね間（重富）氏から、「東島は半人前、圭（慶）助は一人前で合わせて一人半」と見積もり頂きましたが、東島は病身でとりわけ懦弱でございますので、慶助一人前のところ、東島の病氣その他で手間がかかって二、三分も能率が落ち、ようやく六、七分位になるかと存じます。もし東島が実際に来ることになったら、象限儀の持参については私のほうで交渉するほうがよろしいかと存じます。

一、榊原氏の子息は絵も少々出来るとのことですそれは大変よろしいと存じます。門倉準（隼）太は癩癩持ちの癖がありますが、数年来それなりに苦勞もし、人付き合いもしてきているので、少しは癖が直りましたことと思います。門倉へのお怒りやお咎めをお許しいただき、癩癩癖について本人に意見していただければ、大変よろしいかと存じます。

一、大西順二郎（彦根家中、間（重富）氏御門人）は鈍才かつ病身で、年齢もかなりいつているように見えますので、間氏がお考えのように藏前の売算者を付けて一人前に育てればよろしいと存じます。しかしながら今月七日に大西側から（彦根藩の）江戸屋敷に對し、伊能勘解由に隨行して遠國測量をしたいとの願い出があつたそうです。その後、（私の）大津到着までに江戸屋敷願い出の件について言ってくるはずですが、今日までにその件の連絡はありません。

さて、（大西が）私に隨行して遠國出張したい件ですが、間氏に頼んで（測量隊の）京都到着以降、隨行したいと願っているのです、私の増員願が叶い、そのうえで淺草の天文方役所の員數調整に間に合うなら、淺草役所へお願いすればよろしい。しかし増員願が叶わなかった場合や淺草の役所で員數が調達できた場合には、（隨行の件は）どうにもならない旨を言つたところ、（大西は）それはそれで結構だと言いますので、本人の意思に任せ置きました。このお方は



仁彦根にて百五十石筋以上の人に御座候へ共御  
手當は一匁二匁にても宜候無儀内弟子に相成隨  
身仕度旨申候江戸御屋敷より可申付候哉否之處  
未だ相分り不申候後便に可申上候急度の當には  
相成不申候扱人数の義も五人なれば十分と奉存  
候付添ともには六七人にも相成申候五人の處え  
賃馬二三疋も御願被追候様に仕度奉存候

一増人願の書付別紙差上申候宜御執計被下候様  
奉願候尤人数の處は何人と記し不申明置候間御  
加筆可被下候扱不案文誤字も無覺束奉存候先達  
て白紙印形貳枚差上申候御書直し被仰付可被下  
候旅中長文前後混雜不敬も相交申候事と奉存候  
間宜敷御讀分被下度候 恐惶頓首

九月二十二日

高橋尊君机下

伊能勘解由

彦根藩で一五〇石取り檜格以上の人ですが、(本人は) お手當は一匁二匁でも

よい、下僕もなしで内弟子として随行したいと申しております。江戸屋敷から  
随行を申し付けられるかどうか、まだ分かりません。後便にて申し上げます。  
確実な見込みではありません。さて、人数につきましても、五人増員ならば十  
分だと存じます。付き添い人を入れると六、七人にもなります。五人に対し、  
無賃の馬を二、三疋ほど支給をお願いしていただくよう致したく存じます。

一、増員願の書付を別紙にて差し上げます。よろしくお取り計らいくださいま  
すようお願いいたします。ただし、人数のところは何人とは書かず空けておき  
ますので、御加筆ください。さて、推敲無しに書いた文章で誤字があるかも  
しれません。(もし間違っていましたら) 先日、白紙に印だけ押したものを二  
枚差し上げました。(それを使つて) 書き直しを(部下に) お申し付け下さい。  
旅行中の長文の手紙ですので前後が混乱し、失礼な文言も混じっていることと  
存じますので、よろしくお読み分けてください。恐惶頓首

九月二十二日

高橋尊君机下

伊能勘解由



「琵琶湖図」部分

国宝：地図・絵図類 113

伊能忠敬記念館所蔵

無断流用禁止



## 御用日記

## 書簡原文

## 控書部分

## A書簡

文化二年閏八月二十三日

一 勘解由御用先京都より御用状到来 京都御代官小堀中務より達又 今便左之願書差越又

(表書) 西国測量二付増人奉願候

去子年極月西国筋測量御用被仰付 西国筋国々相測候日数之儀荒増積り候様御尋二付是迄年々測量仕候東国北国筋之日数積を以西国筋相測候大凡積日数書付奉差上候処

志州より勢州渡会郡八入海嶋々大難所二御座候上 別て紀州一国悉入海出崎数多 海岸絶壁大岩石 殊二波浪荒ク候二付乗船測量仕候義甚六ヶ敷 絶壁を伝ひ又八岩石二取付 上下辛勞仕候て漸相測申候二付波浪ヲ冠り巖石より落候て怪我等も仕候

私儀は兼て覚悟之儀二御座候得共 御差添之人内弟子共まで大難所之上 紀州八南江張出候国故 別て大暑二付病人不絶出来仕候て手分二も差支難儀仕候

乍併潮時又ハ風波を見合相測候儀二付 中二も手輕病人ハ押て手分測量も為仕候 潮時都合二て日々暮迄も出精相測候ても大難所之西国順礼街道より海岸ハ別て大難所 里数は三倍二も御座

候間 大坂迄三ヶ月と見込候処

此度大坂着六ヶ月余相掛り申候 大坂京都江州測量中所々二て承合 猶又相調候処中国は嶋々数多 北海辺ハ岩石難所二て風波有之候てハ測量も相成兼候趣 四国九州ハ嶋々も入海も数多 蜂之巢 珊瑚樹之如入込候様子二承知仕候

右江戸出立後大坂着迄三ヶ月見込相違仕候儀ハ恐入奉存候 乍然土地不案内二御座候得は西国順礼道之日数相積り候事二付相違仕候 是迄之都合二て八国々測量何ヶ年相掛可申も難斗奉存候 何卒一ヶ年も早く御用相済候様仕度奉存候

可相成御儀二御座候ハ、測量手伝今四五人御増被下候様奉願候 左候へは少々病人出来仕候ても 測量手分に差支茂無之 病人無之候節ハ方位推算地図之下書も出来仕候 右之段御勘弁被成下 御増人被仰付候様奉願候 以上

閏八月

伊能勘解由印

高橋作左衛門殿

一 今夕秋山江罷越 右勘解由より差越候人馬増願書為見置 尤是ハ勘弁之上可奉願 余り日数延引二罷成候二付中国不残測量仕廻 一 応歸府為致 地図等仕立猶又可遣とも存候間 何レ勘弁之上可奉願と存候段申聞置

## 【現代語訳】

文化二年閏八月二十三日

一 伊能勘解由の測量御用先である京都から御用状が到来した。京都御代官の小堀中務から到達した。この便で左の願書を送ってきた。

(表書) 西国測量について増員を願う

去る子年(文化元年)十二月西国筋測量御用を仰せ付けられ、西国筋の国々を測量した、日数についてあらまし見積りをお尋ねになりましたので、これまで毎年測量をしてきた東国、北国筋の日数の見積もりを以て西国筋を測るのにおおよその見積もり日数を書いて差し上げましたところ、志摩から伊勢度会郡は湾が入り組み、多くの島々で大難所である上、特に紀州一国はことごとく入り込んだ湾と海につき出た崎が数多く、海岸絶壁大岩石で殊に波が荒いため船での測量は難しく、絶壁を伝ひまたは岩石に取り付き、上り下りに苦勞しつつやっと測量し、波をかぶり岩から落ちて怪我も致しました。

私はあらかじめ覚悟していますが、派遣された下役の方や内弟子たちにとつて大難所であるうえ、紀州は南へ張り出した国で、とりわけ暑さが厳しく、病人が絶えず出て手分け測量にも差支え難儀しました。しかしながら潮の干満や風波の具合を見て測りますので軽症の病人は無



理に手分け測量をさせました。潮の都合によっては毎日日暮れまで精を出して測っても、西国巡礼街道から海岸までは特に大難所で、距離は通常の三倍にもなります。大坂まで三ヶ月と見込んでいましたが、このたびの大坂着は六ヶ月余かかりました。大坂、京都、近江測量中に所々で問い合わせ、なおまた調べたところ、中国地方は島が多く、日本海周辺は岩場の難所で風波が強く測量も出来かねるらしい。四国九州は数多くの島々や湾が蜂の巣や枝珊瑚のように入り組んでいることが分かりました。

これらのことは江戸出立後、大坂着まで三ヶ月も見込み違いをして申し訳ありません。しかしながら土地に不案内なため西国巡礼道での日数がかかったことについて間違いました。これまでの都合では国々測量に何年かかるのか予想も難しく存じます。なにとぞ一年でも早く測量御用が終了しますよう致したく存じます。なるべくなら測量の手伝い人としてもう四、五人増やして下さるようお願いいたします。そうすれば少々病人が出て手分け測量をするのに差し支えもないですし、病人がいなきときは方位、推算、地図の下書きも出来ます。以上のことをご許可いただき、増員を仰せ付けられますようお願い申し上げます。以上

閏 八月

伊能勘解由 印

高橋作左衛門殿

……  
一、今夕（奥祐筆）秋山（松之丞）を訪ね、右の伊能勘解由からの人馬増加願書の書状を見せ、これはよく考えてから申請するが、あまり日数が延びるので、中国筋の測量が終わったら一旦江戸に帰らせて地図等を仕立て、その後また測量に派遣するのがよいと思う。いずれよく検討したうえで申請したい旨を申し伝えた。

### B書簡

九月一日

九月朔日 登城

一、御勘定前田平右衛門江面会 此間勘ヶ由方より申越候雲州より隠岐江相渡候儀 当秋頃二六可相越旨松平出羽守留守居江達置候得共 日数延引二付北海道江相廻り候儀 冬二相成候間 道順替大坂より京都并湖水相廻り 夫より南海边播州江出時候宜敷節来夏二も別段雲州より隠岐江相渡り可申聞 其段内々出羽守留守居江達置呉候様 相頼候処承知之由 尤道順替り候段 御勘定所宛にて達書被遣候ハ、其書付内々雲州留守居役江為見可申段 平右衛門申聞候事

一、今日勘解由御用先江州彦根江御用状差出即御勘定平右衛門江渡置 御勘定所江之添書例文なり 人増之一件申遣ス

九月一日 登城

一、御勘定の前田平右衛門に面会した。この間勘解由から言ってきた出雲から隠岐へ渡航する件について、当年秋頃には出雲に赴くと松江藩の松平出羽守留守居へ伝えていたが、日数が長引いて予定が遅れ、山陰方面へ廻るのは冬になつてしまうので、経路を変更して大坂から京都と琵琶湖を測り、山陽道播磨へ出て、時候が良い夏季になったら出雲から隠岐へ渡航したいので、出羽守留守居へ内々伝えてもらいたいと頼んだところ、承知したとのことであつた。ただし、経路変更については勘定所あてに届書を出していただければ、それを雲州留守居役にお見せしますとのことであつた。

一、今日、勘解由の御用先である近江国彦根へ御用状を差出した。すなわち御勘定の平右衛門へ渡し置いた。勘定所へ出す添書きの例文である。増員の件について意見を伝えた。

※B書簡（忠敬が京都から出した最初の「増員願」に対する景保の返信）は『高橋（景保）御用日記』（『伊能忠敬研究』66、67、68、70号所収）中に掲載されておらず、書簡の原文は見ることが出来ないが、大谷亮吉著『伊能忠敬』に要旨の記述があるほか、上欄に掲げた景保の控書きから内容を推察することが出来る。



## C書簡

十月二十六日

十一月朔日

一、登城 勘解由方江御用状出又 此間被仰渡候中歸り之義 左之通申遣又

以飛札申遣候 然ハ兼々及御掛合候当御用之儀 兎角果取兼候間中国筋 隠岐并小嶋共測量相済候上 一端歸府有之地図等取調其上二而 再四国 九州江可被相越候様致度段 別紙之通亥十五日伺置候処 今廿六日伺之通中国筋不残測量相済候上 一先歸府可致旨撰津守殿被仰渡候 依之申遣候 可被得其意候 以上

十月廿六日

高橋作左衛門

伊能勘解由殿

右御用状備前岡山江出又 尤御勘定横山太郎右衛門江相渡又

右書中別紙と有之ハ伺書写 先達而勘解由江遣し置候写 此度遣し候積り也

一、御勘定前田平右衛門江面会 勘ヶ由儀中歸り伺之通被仰渡候段通し候処 委細承知二而何レ右達書可差出旨申聞候

十一月一日

一、登城 勘解由あてに御用状を出す。

先日（若年寄堀田撰津守から）ご下命があった測量行を中断して帰府する件について、以下の通り通達する。

急便にて通達する。さて、かねがね申請があった当該測量御用について、かれこれ測量が捗りかねているため、中国筋、隠岐ならびに周辺の小嶋を含めて測量が終了したうえで一旦江戸に帰って地図等を調製し、そのうえで再び四国、九州へ出張したい旨、別紙の通り十月十五日に意見を伺っておいたところ、この二十六日、申請した通り中国筋の測量を完了したら一旦帰府するようにと撰津守殿からご命令があった。よって通達するのでそのように心得られよ。以上

十月二十六日

高橋作左衛門

伊能勘解由殿

・・・・・・・・・・・・・・・・

右の御用状を備前岡山へ出した。但し勘定所の横山太郎右衛門へ渡した。

右の書中に別紙とあるのは伺書の写しで、先ごろ勘解由へ送っておいた写しである。このたび送ってやる予定である。

一、勘定所の前田平右衛門へ面会した。勘解由

の中途帰府について申請の通りご下命がある旨、話を通したところ、委細承知のことであった。いずれ右の通達書を差し出す旨を申し伝えた。

\* \* \* \*

## 【参考資料】

『伊能忠敬 測量日記』佐久間達夫 大空社  
『伊能忠敬』大谷亮吉 岩波書店  
『伊能忠敬研究』66、67、68、70号  
『伊能忠敬 御用書簡集』日本学士院蔵  
『伊能忠敬未公開書簡集』伊能忠敬研究会編

註「第十四書簡」原文の解説は日本学士院蔵『伊能忠敬御用書簡』及び大津市教育委員会蔵「大津より高橋景保宛書簡（文化二年）」（伊能忠敬研究会編『伊能忠敬 未公開書簡集』所収）を参照した。また『御用日記』の原文は『伊能忠敬研究』第68・69・70号所載の原文を引用した。



## 第1次測量の大図と下図

玉造 功

### 1. 伊能忠敬記念館の下図の来歴について

最初に香取市立伊能忠敬記念館に所蔵されている下図の来歴について触れておきたい。

昭和24年、伊能三郎右衛門家第15代当主の伊能康之介氏所蔵の『伊能忠敬遺書』215種961点が重要美術品に認定された。その後、文化財保護法制定にともない昭和32年にはそのまま重要文化財となり、後に佐原市に寄贈された。その重要美術品認定書の中で下図と思われるものは「第2部 測量図」の48番の「東海道四国大島等下書 6枚」だけである。6枚の内訳については青木司「佐原市所蔵の伊能図について」に詳しい。この下図6点は統合・分類しなおされて現在は7点の国宝として指定されている。

平成15年に伊能淳氏が古文書、絵図、器具など3401点を寄贈したが、その中の下図について裏面記載事項に至るまで詳細に調査したのが『伊能忠敬関係資料目録―下図』（以下『資料目録―下図』と略記）である。この目録では、下図を広域下図、小区域下図、江戸府内下図、断簡に仮分類した。広域下図は小区域下図より広域な部分を描写している下図とし151点を紹介している。小区域下図は1日程度の測量部分を下図に起こした地図で93点を数える。江戸府内下図は江戸府内図の下図と先行して行われた江戸周辺の下図を含み62点からなる。断簡は下図の切れ端や白紙で、断簡が129点、白紙が11点である。

平成18年に伊能洋氏が918点を寄贈したが、

下図については、『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』の「〇九九、地図下図類」にまとめられている。

同じく平成18年には及川昭子氏が伊能図下図13点を寄贈した。この下図13点は小図縮尺であり、最終上呈大図「大日本沿海輿地全図」の該当図郭と一致する。この及川家下図と共通の特色を有し補完関係にある一連の下図としては、東京大学総合図書館所蔵の56点、三康図書館所蔵の24点、神戸市立博物館所蔵の1点が知られている。最終上呈大図214枚の中で、描画範囲が一致する小図縮尺の下図94枚の存在が明らかになったわけである。

及川氏による寄贈を紹介した新聞記事によると「骨董品収集が趣味だった父親が昭和十年代に入手」（平成18年8月23日付け千葉日報）したもののことである。東京大学総合図書館の下図は昭和5年に購入したとの、三康図書館所蔵の下図は昭和4年に購入したとの記録があることから同時に市中に流出したものであろう。なお、及川家寄贈の下図は伊能家伝来のものではないためか、国宝の指定を受けなかった。

平成22年に伊能忠敬関係資料2345点が国宝に指定された。その内「地図・絵図類」の124番〜522番の399点が下図である。

なお、平成23年に藤岡健夫氏が忠敬の書状など4点を寄贈し、その中には「伊豆国稲取村付近下図」1枚を含む。国宝指定後の寄贈のため国宝ではない。

文化庁が国宝に指定した際に、重要美術品の「東海道四国大島等下書 六枚」、『資料目録―下図』、『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関係文書目録』の番

号や資料名とは関係なく、新たに番号や資料名が付けられた。そのため『資料目録―下図』は各下図の寸法・縮尺・数量・墨書や朱書による記載事項など詳細に記載されている上に資料数も多く有用であるが、各下図がどの国宝に該当するかを比定することが困難な場合もある。

本稿においては、第1次測量の下図や大図について紹介してみたい。

### 2. 寛政12年大図について

寛政12（1800）年の第1次測量の成果となつた地図の製作については、『測量日記』（「寛政十二年庚申 蝦夷于役志」）の最後の方に次のように記されている。

十一月初より蝦夷地より日本地行程画図に昼夜取かかり仕立申候。津宮久保木太郎右衛門、門倉隼太、平山郡蔵、栄女等手伝致し候。漸十二月廿日頃迄に出来上り、廿一日下御勘定所へ持参の上、坂本伝之助殿へ相渡し申候。

大絵図廿一枚（内十一枚は日本地、十枚は蝦夷地）、小絵図壹枚（日本地より蝦夷地合図大画図十分一）、外に大画図、小画図共、同日浅草へ遣し候。是は高橋先生より堀田摂津守様へ御上げに相成候。

久保木太郎右衛門清淵は忠敬の年下の友人で、佐原村近くの津宮村の名主にして儒学者。門倉隼太と平山郡蔵は測量隊員。栄女（大崎栄）は忠敬の4番目の妻で、久保木清淵に学び文妃や小窓と号した漢詩人である。

彼らの手伝いを得て完成した地図は、「日本地

より蝦夷地合図」の小絵図が1枚と大絵図21枚からなり、大絵図の内訳は「十一枚は日本地」と「十枚は蝦夷地」で構成されている。

縮尺については添書や凡例によると大絵図（大図）は「曲尺二寸九分七厘を一里」、小図は「大図の十分之一」と記されている。換算すると大図は43、636分の1となり、小図は436、363分の1となる。

「小絵図」に相当する小図は伊能忠敬記念館に二鋪、東京国立博物館と国立歴史民俗博物館にも所蔵されている。「大絵図」に相当する大図としては国立公文書館の10軸、東京国立博物館の8鋪が知られている。

### 国立公文書館の寛政12年大図

国立公文書館の「松前距蝦夷行程測量分図」は江戸幕府の紅葉山文庫旧蔵で、針穴のない大図10枚が揃っており、大絵図の「十枚は蝦夷地」という記述と符合している。この10枚は国立公文書館デジタルアーカイブで閲覧、ダウンロードができる。以下その国立公文書館デジタルアーカイブの件名と測線の両端末の地名と有名な地名を記した。

- ・松前距蝦夷行程測量分図1  
シリウチー箱館ー山コシナイ
- ・松前距蝦夷行程測量分図2  
ヤマコシナイーオシヤマンベーアブタ
- ・松前距蝦夷行程測量分図3  
アブターモロランーシラオヒ
- ・松前距蝦夷行程測量分図4  
シラオヒーユウブツーモンベツ
- ・松前距蝦夷行程測量分図5  
ミツイシーウラカワービロオ

・松前距蝦夷行程測量分図6

ビロウートウブイーオホツナイ

・松前距蝦夷行程測量分図7

オホツナイーシラヌカークスリ

・松前距蝦夷行程測量分図8

クスリーゼンホフチーアツケシ

・松前距蝦夷行程測量分図9

ノコベリヘツーアン子ヘツーニシベツ

・松前距蝦夷行程測量分図10

モンベツーニイカツフーミツイシ

デジタルアーカイブでは、『内閣文庫百年史』89頁を踏まえて「白老ー門別間は重複するので実質9図」と解説しているが、これは誤りである。白老ー門別間は重複しておらず10図が揃っている。10番とされているモンベツーミツイシの図は、正しくは4番と5番の間に位置すべきものである。

蝦夷地の大絵図に相当する10枚は知内から始まっており、松前などの渡島半島南部の地域は含まれていない。これは『測量日記』の寛政12年5月21日の記事に、知内までが松前領で、川を境としてここからは御用地（前年の寛政11年に東蝦夷地が上地され幕府直轄地となった）であると記していることが関係する。中塚徹朗会員の「伊能忠敬と堀田仁助の蝦夷地測量」によると、知内川の境界には門、柵とともに、境界を示す標柱が立てられ、忠敬の前年に蝦夷地を測量した堀田仁助が『幻空雑記』にそのスケッチを残している。新たに幕府直轄地となった「蝦夷地」とは区別して、幕藩体制のもとにある松前藩領は津軽海峡以南と同様に「日本地」とあるという認識であろう。第2次測量以降になると、「蝦夷地」を意識した「日本地」という表現は使われていない。

### 東京国立博物館の寛政12年大図

寛政12年大図の東京国立博物館での名称は「蝦夷地実測図」、国の重要文化財指定名称は「蝦夷地図」と異なる。針突法によらずに作成され、体裁は製作当時と同様に折り畳まれた状態である。「浅草文庫」の朱印が押されている。浅草文庫は明治初期に成立した官営図書館で、幕府の紅葉山文庫、昌平坂学問所、蕃書調所などの図書を引き継いだ。佐々木利和（1997）によると、表紙に相当する部分に以下のように墨書されているという。

- ・蝦夷地第一図 自シリウチ至ヤマコシナイ
- ・蝦夷地第二図 自ヤマコシナイ至アブタ
- ・蝦夷地第三図 自アブタ至シラオイ
- ・蝦夷地第七図 自ヒロウ至オホツナイ
- ・蝦夷地第八図 自オホツナイ至クスリ
- ・蝦夷地第九図 自クスリ至アツケシ
- ・蝦夷地第十図 自アツケシ至ニシベツ
- ・□□□□□□ 自平館三廐至松前知内

寛政12年の「蝦夷地大絵図」に相当する10枚のうち白老から襟裳岬を経て広尾までの3枚を欠いている。その一方で奥州平館から三廐までと津軽海峡をはさんで松前・福島・知内まで描いた大図が1枚所蔵されている（図1）。「日本地大絵図」11枚のうち、最後の11番目の「日本地第拾壹図」に該当する。但し残りの江戸から平館までの10図に相当するものは欠いている。

東京国立博物館HPの画像検索では、修理前と修理後の2種類の「蝦夷地実測図」の画像を閲覧できるが、地名が判読できない画質である。近年COBase（国立文化財機構所蔵品統合検索システム）が構築され、図1のように地名が判読できる画像をダウンロードできるようになった。



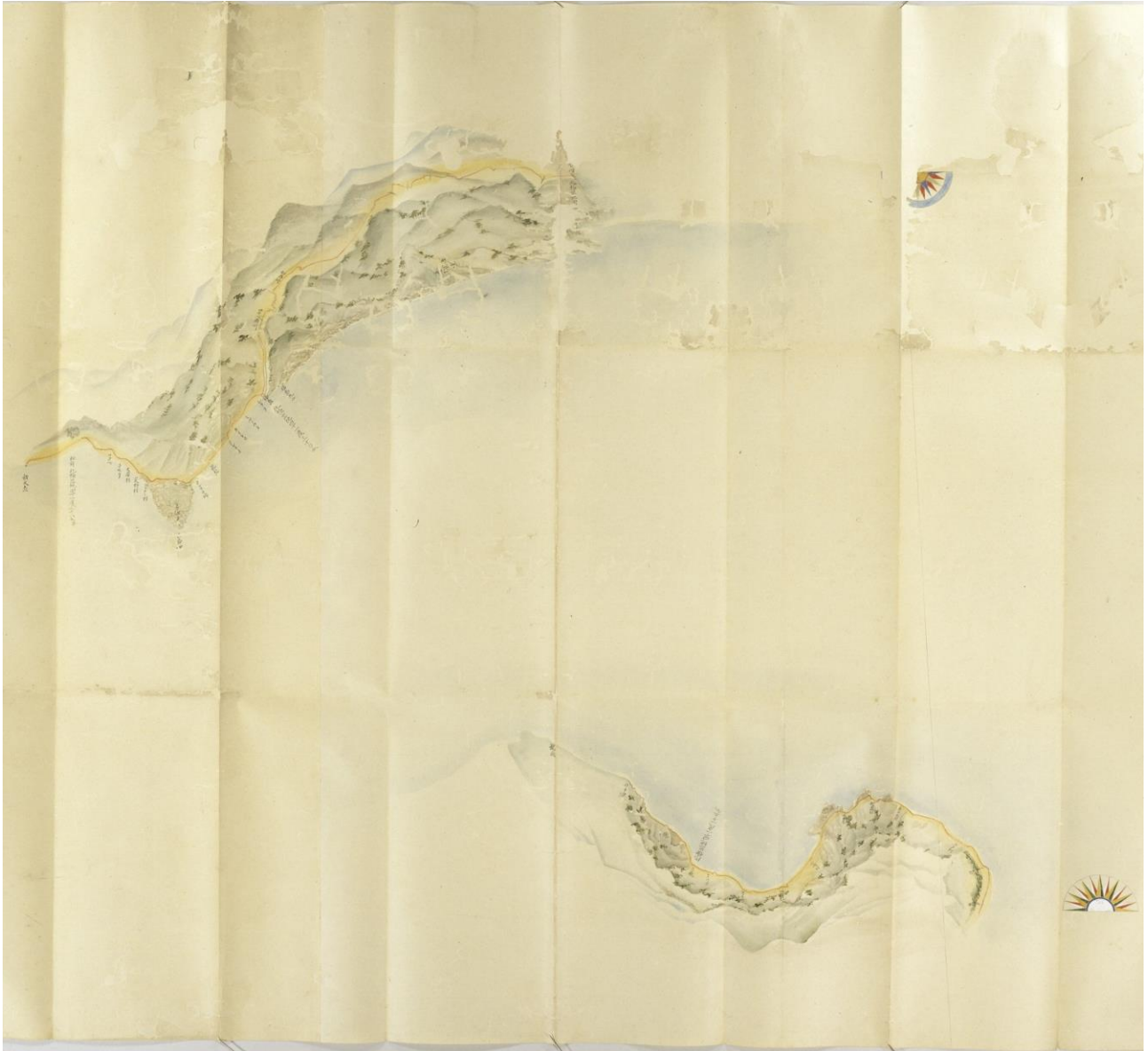


図1 「蝦夷地実測図（□□□□□ 自平館三厩至松前知内）」 出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム

### 3. 寛政12年大図の下図群

第1次測量後に幕府との交渉の結果西蝦夷地測量を断念してからは、『測量日記』において「日本地」という「蝦夷地」を意識した表現は使用されなくなる。

第1次測量に限定できる「日本地」という文字が裏面に墨書された下図4枚が伊能忠敬記念館に所蔵されているので紹介したい。

#### 下図「日本地第七番」について

縮尺と寸法は『資料目録―下図』によるものであり、他の下図も同様である。

○国宝・地図・絵図類253

・資料名「自陸奥国稗貫郡花巻村至陸奥国二戸郡小繫村下図」

・縮尺 約48000分の1

図2は裏面の記載事項で、「日本地第七番」「花巻ヨリ沼宮内」と墨書され、「⊕」に「八」と朱書きで上書きされている。

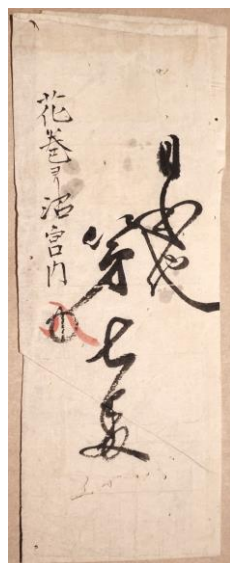


図2

この下図は『資料目録―下図』の次の3図からなる。継目から剥がれているため、『資料目録―下図』では別個の下図と判断したのであろう。

・広域下図27「自陸奥国紫波郡郡山城下至陸奥国二戸郡小繫村下図」

・断簡25「自ミヤノ目村至南雀村下図」

・断簡129「花巻町下図」

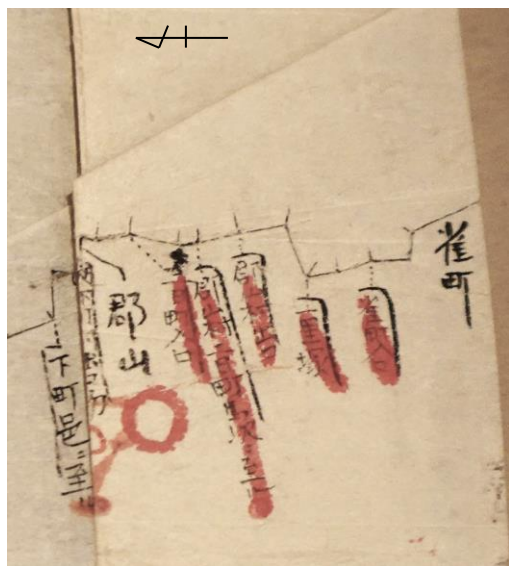


図4



図3

測線は墨線でケバ状の短線が測点から派出している。奥州街道の花巻・盛岡・沼宮内・小繫を結ぶ。図3は下図の南端の花巻の部分である。

「花巻町宿二至ル○泊乃測量」と記されている

が、「乃」は「すなわち」、「測量」は星測したということである。『測量日記』の寛政12年5月2日の「花巻宿八ツ頃に着、止宿、夜測量」、帰路の10月2日の「花巻川口町、夜晴天測量」の記事と一致している。なお、第2次測量の帰路では、享和元年11月17日に「花巻川口町、雪夫れより雨」とあり星測をしていない。この下図が第1次測量時のものであることの傍証である。

図4は岩手県盛岡市の南に位置する奥州街道の宿駅である郡山宿（日詰郡山宿）の部分である。図4では「日詰町」を「雀町」と誤記している。

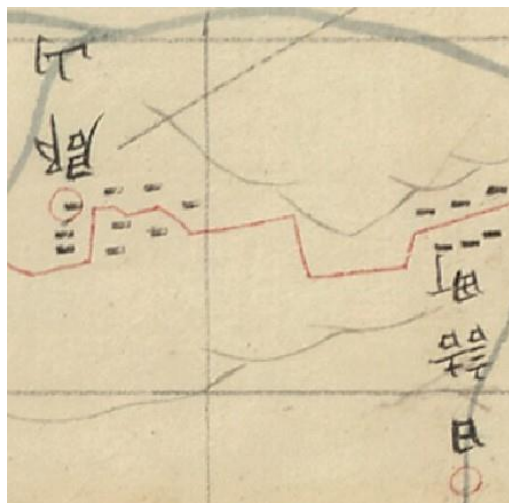


図5

この下図は村名の誤記やカタカナ書きが非常に多いことも特色である。その一部を列記すると、津志田村を土田町村と、賣家村を折屋村と、武道村をブントヲ村と、巻堀村を模堀村と、草桁村を草下駄村と、丹藤村をタント村と、川原木村をカイヤキ村と、馬羽松村を真濱村と記している。この誤記の仕方は、写し間違いというよりも、聞き間違いのようである。どのような情報から下図を作成したのであるうか。なお、これらの個所は『測量日記』や各種伊能図では正しく記されている。交会法による方位線は墨色で「早常山」（早池峰山を誤記したものか）や「岩鷲山」（岩手山の別名）に向かって引かれている。

図中には南北方向の成分を示す朱線が引かれ「一尺四寸六分一リ強」と朱書され、東西方向については線がなく隅に「東西 四寸□分八厘」と墨書されている。

参考までに、図5としてアメリカ議会図書館所蔵大図の第50号から同じ範囲を載せてみた。

#### 下図「日本地第八番」について

○国宝・地図・絵図類252

・資料名「自陸奥国二戸郡一ノ戸村至陸奥国三戸郡五ノ戸止宿下図」

・寸法 42・2×93・5cm

・縮尺 約45,000分の1

図6は裏面の記載事項で、「日本地第八番」「九」「ミヤクナイヨリ五ノ戸二至ル」と墨書されている。「ミヤクナイ」は沼宮内のことであろう。

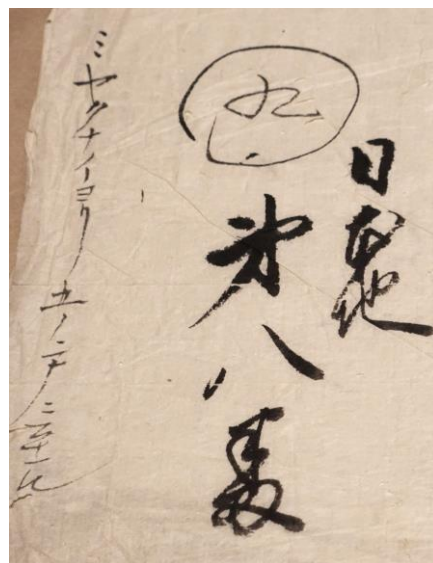


図6

測線は墨線で、奥州街道を小繫村から一ノ戸、三ノ戸を経て五戸を結ぶ。

地図・絵図類252と253は裏面に記載されている範囲と、実際の下図の範囲が一致していない。両図の裏面記載事項では沼宮内が境界とされているが、実際には沼宮内ではなく小繫村が境界となっている。地図・絵図類252に文化庁が付けた国宝の資料名も、図7の一ノ戸村より南の村々が含まれておらず下図の範囲と一致していない。

図7では南北方向に朱線と墨線が引かれている。墨線は末松山（浪打峠のこと）で、歌枕の末の松山に比定する説がある）から南北2方向に引か





図7

れた方位線である。

朱線は図8の模式図のように引かれ、南側の小繋く三ノ戸の寸法は「一尺九寸二分五リ」、北側の三ノ戸く五ノ戸は「一尺一寸六分八リ」と朱書されている。東西方向の寸法は数値を確認出来なかった。なお、『測量日記』では五ノ戸と三ノ戸間の距離を4里32町44間としている。

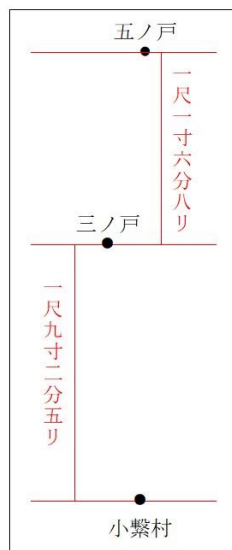


図8

図7に「此処小性戸村」とあるのは光松堂村のことである。図9では「朝道村馬次ニ至ル」「此所朝水村出口」と記し「浅水」と朱書きで訂正している。他にも釜沢村を「カバザハ村」とするなど、この下図も誤記やカナ書きが目立つ。

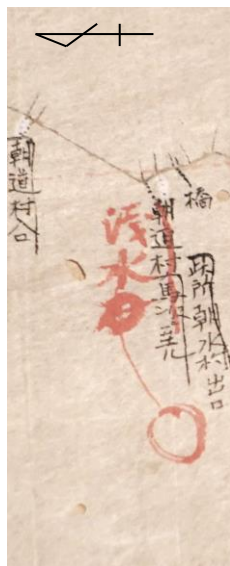


図9

また記載されている村名も少ない。この下図では一ノ戸と小性戸（光松堂）村の間に村名がないが、アメリカ大図では野田村、女鹿口村が追加して記載されている。このことは第1次測量の『測量日記』と第2次測量の『測量日記』についてもいえることである。野田村と女鹿口村の名前は第1次測量の『測量日記』には無く、第2次測量の享和元年11月14日になって記載されている。

下図「日本地第九番」について

○国宝・地図・絵図類251

・資料名「自陸奥国津軽郡小湊至陸奥国三戸郡五

ノ戸下図」

・寸法 66・8×111・6cm

・縮尺 約50,000分の1

・図10は裏面の記載事項で「日本地第九番」

「五ノ戸ヨリ小添（湊）」と墨書されている。

この3枚の下図では、「日本地第七番」には「八」

「花巻ヨリ沼宮内」と、「日本地第八番」には「九」

「ミヤクナイヨリ五ノ戸ニ至ル」と、「日本地第九番」には「十」

「五ノ戸ヨリ小添（湊）」が書き

加えられているが、数字の意味は不明である。



図10

この下図も誤記やカナ書きが目立つ。清水川村を清水村と、口廣村を口風呂村と、狩場沢村をカリバ沢村と、馬門村を馬角村としている。

測線は墨線で、奥州街道を五ノ戸から七ノ戸を経て野辺地までと、野辺地からは陸奥湾沿いに夏泊半島の付け根の小湊を結ぶ。

朱線は南北方向の成分を示すもので、図8の場合のような東西方向の朱線は確認出来なかった。五ノ戸と七ノ戸間の南北方向の寸法は「一尺三寸八分四リ」、七ノ戸と野辺地間の南北方向の寸法は「九寸一分六リ」と記されている、小湊と

野辺地間の南北方向の寸法は図11に「七寸五分七リ五毛」と朱書されている。

図11では測線も方位線も墨線であるため見づらくなっているが、測線にはケバ状の短線が測点から派出しているので区別できる。

注目すべきは、小湊の東側の「海辺エ出ル」あたりから北側に向かって夏泊半島沿岸に測線が無いことである。夏泊半島の測量は第2次測量時であるから、この下図は第1次測量の成果図であるということがわかる。

図11の北に延びている墨線は全て方位線である。タキノ岬を目標とする方位線が2本あり、○が記され、交点には黒点が記されている。また墨が薄いため白径（ヘラなど）を押し当てて引かれた圧迫痕）が確認出来る。方位線の中には陸奥湾対岸の「恐山中」と「恐山右高」を目標とするものも見いだせる。

# 下図「日本地第十一番」について

○国宝・地図・絵図類250

・資料名「自陸奥国津軽郡平館至陸奥国津軽郡三

厩下図」

この下図は広げること自体が破損の危険を伴い、閲覧や撮影に耐えられる状態ではないとのことであった。そこで、『資料目録下図』によって紹介する。

・寸法 84・0×123・5cm

・縮尺 約47,000分の1

・裏面の墨書事項

「日本地第拾壹番 自平館至宇鉄」

「平館ヨリ三馬ニ至ル」

裏面の墨書事項から判断すると、この下図は地

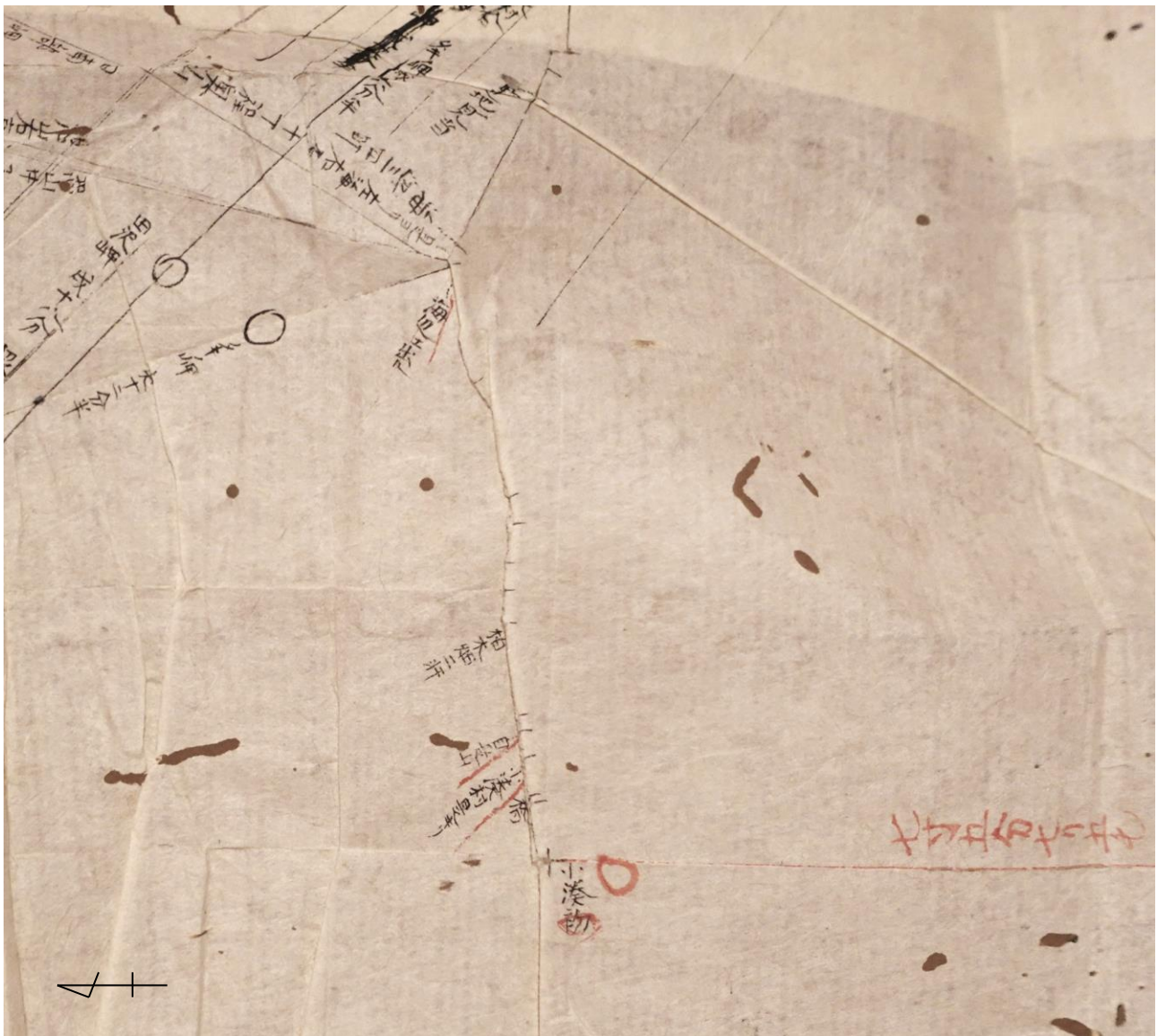


図11



図・絵図類103「自陸奥国津軽郡三厩至陸奥国厳手郡平館図」の下図、図1の東京国立博物館の寛政12年大図「自平館三厩至松前知内」のうちの奥州側の部分の下図であろう。

なお「日本地第十番」の下図は伊能忠敬記念館には現存しない。「日本地第九番」「日本地第拾壱番」の記載範囲から、「日本地第十番」の範囲は、小湊から陸奥湾岸を青森へ、更に津軽半島の東岸を北上して平館までであろう。

#### 縮尺のばらつきについて

第1次測量の大図の縮尺は43,636分の1のはずであるが、『資料目録下図』に記載された各下図の縮尺は約45,000分の1、約50,000分の1、約47,000分の1であり、ばらつきがある。『資料目録下図』の凡例によると、縮尺の算出については「実測により、およその縮尺をそのまま記入」としている。主要地点間の下図上の距離と実際の距離からおおよその縮尺を割り出したということであろう。

一方、第1次測量の添書に次のように記されている。

方位並里数の儀は密測とは難申御座候間、少々の差の儀も可有御座候。

このように、歩測では距離の誤差が多いため、その数値から43,636分の1で作図しても、実際にはその通りの縮尺にはならず、下図によってばらつきも出てしまったということであろう。第2次測量以降の大図は縮尺が36,000分の1である。間縄等を用いて測量精度が高まったことを考えると、これらの下図は第1次測量の下図と考えるべきであろう。

#### 4. 伊能忠敬記念館の寛政12年大図について

『研究図録』の31頁では伊能忠敬記念館所蔵の伊能図から、「寛政12年か享和元年の測量(第1・2次測量)成果にもとづく地図」8点の概要を紹介している。その中に、寛政12年の第1次測量によるものと限定することが可能な大図があるので紹介したい。

#### 日本地第九番の大図か

○国宝…地図・絵図類111

・資料名「自陸奥国三戸郡五ノ戸至陸奥国津軽郡小湊宿図」

・寸法 176・9×85・3cm

描かれているのは五ノ戸から小湊までの範囲であり、「日本地第九番」の記載がある地図・絵図類



図 12

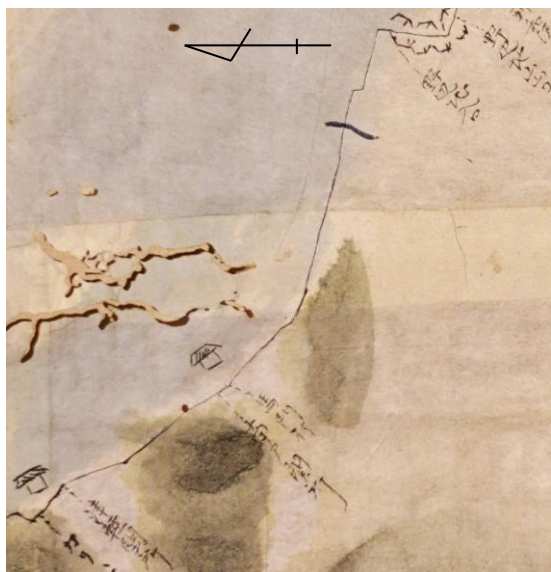


図13

251「自陸奥国津軽郡小湊至陸奥国三戸郡五ノ戸下図」を前提として作製された大図である。  
 図12を下図の図11と較べてみると、大図とはいえ、下図から方位線を除き、海と山にざっと着色して、集落を示す建物や川を書き加えただけである。測線は下図と同じく墨線である。清水川村を清水村と、口廣村を口風呂村とするなど下図の誤記を引き継いだままで訂正されていない。  
 下図の図11に較べ、粗雑とはいえ彩色されたことで小湊の北に広がる夏泊半島の存在はより明確になった。半島沿岸に測線が無く、第1次測量の成果図であることが確定する。  
 陸地で彩色が施されているのは図13の津軽関所と南戸（南部力）関所のあたりまでであり、野辺地から南下する奥州街道は無彩色となる。  
 彩色について『測量日記』に記した凡例では、日本地も三厩より野辺地は蝦夷地と海上連続しているの、蝦夷地と同じく彩色した。その余は

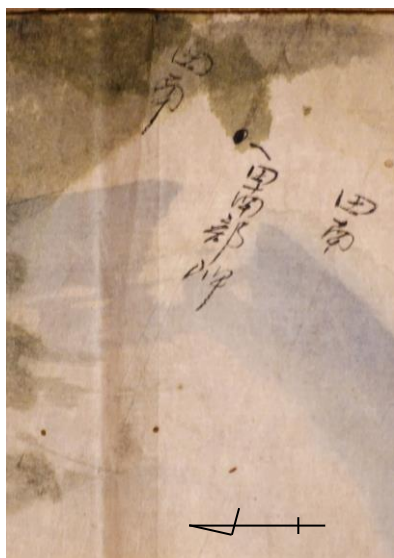


図15

図15には陸奥湾対岸の下北半島の田名部付近が簡略な彩色で描かれている。第2次測量で測量した地域であるので測線は無く、田名部は「田南部」と誤記されている。田名部では表立った人々は学文を好むと『測量日記』に記す程、忠敬に強い印象を与えた場所である。

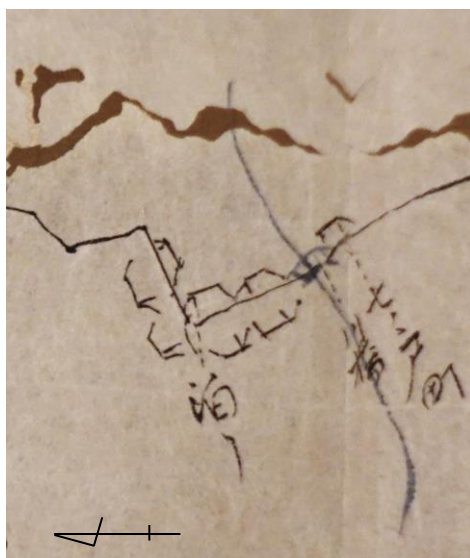


図14

長途であり細密ではないので、駅路と遠測の高山を図としたと記している。図14の七ノ戸付近のように川が彩色されている以外は下図と大差なくなる。「泊り」などは下図レベルの情報である。



図16

日本地第十番の大図の一部か  
 ○国宝・地図・絵図類<sup>94</sup>  
 ・資料名「自陸奥国久栗村至小湊村図」  
 ・寸法 32・5×43・5cmによる  
 この大図（図16）に描かれているのは小湊から青森の手前の久栗村までであり、本来は津軽半島東岸の平館まで続く大図「日本地第十番」があり、その一部が残ったものであろう。  
 大図でありながら藤沢村を富士村とする誤記が残っていることや、荒いタッチで彩色されている点で、地図・絵図類111の「自陸奥国三戸郡五ノ戸至陸奥国津軽郡小湊宿図」と共通している。  
 夏泊半島の海岸に測線は無く、第1次測量の成果図である。



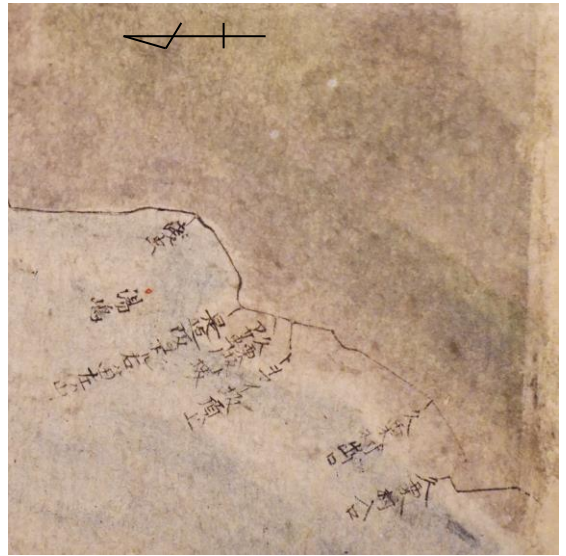


図 17

図17では浅虫の沖合に「湯嶋」と記されている。湯ノ島は現在でも浅虫温泉のシンボルとして知られている。「是迄阪ヲ下ル、右ハ田左ハ山」などと下図レベルの記載事項が残っている。

地図・絵図類111「自陸奥国三戸郡五ノ戸至陸奥国津軽郡小湊宿図」と地図・絵図類94「自陸奥国久栗村至小湊村図」の2枚の大幅は東京国立博物館(図1)や国立公文書館の寛政12年大幅に較べて完成度が低い。下図から完成図を作製する際の、中間段階の試作品ではないだろうか。

#### 日本地第十番の大幅の一部か

○国宝・地図・絵図類<sup>95</sup>

・資料名「陸奥国ナツ泊付近図」

・寸法 32・3×36・5cm

図16では夏泊半島の先端部が欠落している。ちょうどその部分に該当しそうな大幅が図18である。雑な彩色や測線が無いことは共通する。

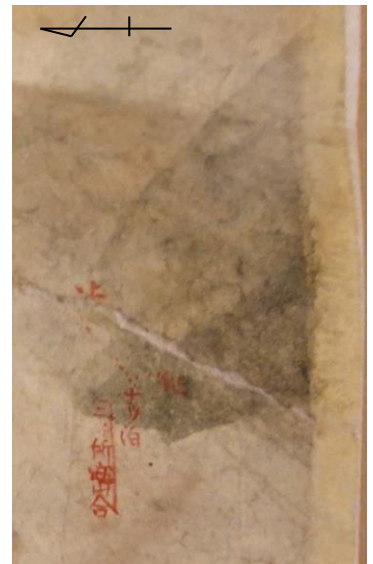


図 18

先端部に「ナツ泊」「二ヶ所密合」と朱書され、夏泊半島の沖合にも墨書された方位線に「恐山 右」「弁天岬」と朱書されている。ただし他の寛政12年大幅には方位線や朱書された目標地は記載されていないので疑問が残る。

#### 日本地第十一番の大幅か

○国宝・地図・絵図類103

・資料名「自陸奥国津軽郡三厩至陸奥国巖手郡平館図」

・寸法 65・3×93・2cm(による)

『研究図録』の46頁に詳細な画像と解説がなされている。文化庁による国宝の資料名中の「巖手郡」は「津軽郡」の誤り。図19が地図部分の全体であるが、津軽海峡に彩色されていない点や、海辺の平地に彩色している点で他の大幅と異なる。

石崎村をイツサキ村、母衣月村をホロ月村などと表記したままであることや、「従是山へ上ル」「此所ヲシャリ石(御舍利石のことか)出ル」などと下図段階の注記が残っていることなどは他の大幅と共通している。なお、『研究図録』では図上計測の結果から寛政12年大幅の縮尺とみられるとする。



図 19

図20は三厩から宇鉄までの部分である。残念ながら折皺で宇鉄の文字が確認出来なかった。



図20

この大図の用紙の北端には図21のように方位線と「三厩ヨリ箱館山マテ 五尺三寸二分五リ」と図上の寸法が墨書されている。他にも「カヤベ岬」、「サキ元岬」、「藤別（当別か）岬」にも同様に記されている。短い方位線に「白昏岬」などと蝦夷地側の地名を記したものもある。この大図は図1の東京国立博物館の平舘・三厩と津軽海峡をはさんで松前・福島・知内を描いた大図と同様に、蝦夷地側と一続きの大図とすることを前提に図上の寸法を記入したのではないか。

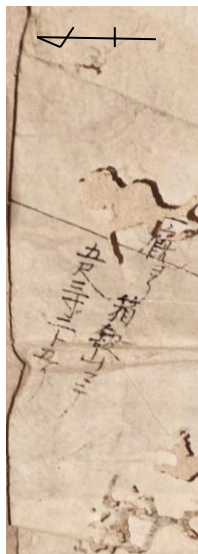


図21

**要注意！ 夏泊半島はいつ測量したか**

『伊能図…東京国立博物館所蔵伊能中図原寸複製』（2002年）が「測量隊と行程」の第1次測量行程図で陸奥湾に突き出た夏泊半島の沿岸に測線を描き、第2次測量行程図で夏泊半島の付根に測線を描いた。これがその後の測量ルート図や『研究図録』にまで引き継がれているが、これは誤りであるので注意を要する。

第1次測量の小図である地図・絵図類1「寛政十二年測量自江戸至蝦夷西別小図」（図22）では夏泊半島は「不測量」と明記され、測線は夏泊半島の付根の小湊を通って青森と野辺地を結んでいる。また第1次測量の『測量日記』の往路・復路ともに夏泊半島にふれていない。第2次測量の『測量日記』の享和元年11月4日に「此日郡蔵、慶助を手分し、夏泊を測らしむ。野辺地にて出会せんと日配りをなして遣ぬ」とあり、夏泊半島測量は第2次測量によるものである。



図22

**【図版の出典】**

図1は東京国立博物館所蔵。

国立文化財機構所蔵品統合検索システム

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>) による。

図2、3、4、6、7、9、10、11、12、13、

14、15、16、17、18、19、20、21、22は伊能忠

敬記念館所蔵。無断流用禁止。

図5はアメリカ議会図書館所蔵。

**【参考文献】**

・文部省「重要美術品認定書」1949年

・青木司「佐原市所蔵の伊能図について」『地図』34、

2、1996年

・『伊能忠敬関係資料目録―下図』伊能忠敬記念館、2

005年

・安藤由紀子・伊能陽子『世田谷伊能家伝存 伊能忠敬関

係文書目録』2006年

・星埜由尚他「東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」と三

康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」会報98号、202

2年

・国立公文書館編『内閣文庫百年史』国立公文書館、1

985年

・中塚徹朗「伊能忠敬と堀田仁助の蝦夷地測量」

会報103号

・佐々木利和「博物館書目誌稿 帝室本之部 地図篇三

伊能忠敬『蝦夷地実測図』および『九州沿海図』につ

いて」[Museum] 五四八号、東京国立博物館、199

7年

・平井松午・島津美子編『伊能図研究図録』創元社、

2022年

・『伊能図…東京国立博物館所蔵伊能中図原寸複製』

日本国際地図学会・伊能忠敬研究会監修、武揚堂、

2002年



# 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第三十七回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修

渡辺 一郎

編著

井上辰男

【第九次測量】

(伊豆七島)

伊豆半島(下田町く熱海)

自 文化12年11月11日

至 文化12年12月30日

文化12年11月	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
宿泊日・旧暦	(1815)					
11	(1211)	下田町	静岡県下田市	坂野屋源次郎 道家八郎左衛門	下田町滞留。当月望食の支度。	一〇二
12	(1212)	同	同	同	同所滞留。	一〇二
13	(1213)	同	同	同	同所滞留。恒星測定	一〇二
14	(1214)	同	同	同	同所滞留。恒星測定	一〇二
15	(1215)	同	同	同	同所滞留。恒星と午中太陽測定	一〇二
16	(1216)	同	同	同	同所滞留。月食と午中太陽測定。四時過より月食初虧かけ。即食皆既。九時半時過復円。それより星測、八ッ時過に至て止。	一〇二
17	(1217)	同	同	同	同所滞留。夜星測。	一〇二
18	(1218)	同	同	同	曇天微雨。同所滞留。	一〇二
19	(1219)	下田町	同	同	晴天。同所滞留。	一〇二
20	(1220)	濱村	河津市	百姓斎賀屋十兵衛 名主幸左衛門	下田町出立。稻生沢川(舟渡し)、岡方村、柿崎村、白濱村、縄地村、谷津村、濱村に至る。濱村滞留測。見高村、濱村、河津庄界より初め、沿海右山逆測。字ナナネノ鼻、左に沖ササネ根、右谷奥に誓念寺、右山根本村(人家七十七軒散在)、右河津笹原村内古城跡、ハ印を残す。是より天城山の麓梨子本村迄河津川添横切の残印なり。右谷中居村測処迄一町計。河津川尻渡、此所より川上に舟渡あり。川上天城山より流出す。川中央界、河津庄谷津村、人家八十二軒、字塩釜、左に黒石、左に白岩、字一本松鼻、左見切り、左千束岩、字小蝶ノ鼻、右に鶴ノ根、字大野浦鼻、ハッ口浦、ハッ口崎、右入江字汐吹、又濱村(此所飛地)、字平磯、平磯濱、(左海底根多し)、日影鼻、左に平根、字ヤンタ濱、須ノ木須鼻、松下鼻、左に沢田根、左に田中根、字庄部沢(昼休)、庄部沢濱(舟置場)、字中ノ島根、字火打濱、飛瀬鼻、水尻鼻、入江奥の字本水尻、小入の字中ノ水尻、中ノ鼻、クグリ岩鼻(右に大穴あり)、右入奥の字赤河津、亀ノ甲鼻、河津庄縄地村字小縄地浦、字小縄地崎、小安浦(舟置場)、右谷奥に本村人家八十一軒、縄地川、右に当村鎮守子安大明神、修験永宝院式地夜須神社という。	一〇二

23	22	21-2	宿泊日・旧暦
(23)	(22)	(21)	(西暦)
濱村	濱村	筏場村	宿泊地
同	同 河津市	同 河津市	現・市町村名
同	百姓斎賀屋十兵衛 名主幸左衛門	名主五郎右衛門	宿泊宅
特記・天体観測			
左にチヨツホリ岩、字チツヨホリ鼻、白濱村、左に黒根、左に雀島（遠測）、同村地内字千ヨツホリ鼻ノ内、去月十三日打止残し御用抗に繫沿海逆測終る。それより乗船帰宿。恒星測定			
濱村滞留測。豆州加茂郡梨本村地内、五月十六日残し置測量御用抗より初め、海辺へ向て川津川筋街道測量。字大鍋口、右川津川向小鍋村人家、湯ヶ野村（川津川端温泉場あり）、（川向）字湯向、大群沢、下佐ヶ野村、（右川向）禅宗大平山寿雲院、（右川向）筏場村枝天川ノ小家、矢野村、筏場村、佐ヶ野川、左山上に禅宗三養院、左山手より流（小流）を渡る。本川へ落合。昼休、筏場村。			
右川向岩鼻（弁天岩という）、左山手よりの小流を渡る。直に本川に落合。（右川向）峯村人家続、沢田村、本川分水、寺川という。田中村、右畑中に河津郷惣社来宮、笹原村左城山裾に影山大明神社、右川向谷津村人家、右川向谷津村内河津之神社、俗に三社八幡宮という。右谷奥に谷津村内字河原ノ温泉場あり。式内佐々原比呼之命神社（俗姫宮大明神という）、別当山伏地藏院。濱村、同村人家中左り禅宗長福寺、左下田より根府川往還横道あり。右当村土神午頭天王之社、即海辺濱手に出て八印に繋ぎ、川津川道街道測量終る。それより帰宿。恒星測定			
濱村滞留測。豆州加茂郡界、河津庄濱村・見高村字ナナネ鼻より始め、沿海左山順測。字今井濱、右にカモメ岩、右に丸岩、右に丑ヶ根、右に（汐冠）丑ヶ根二つ、字走り馬、字恵美須崎、左恵比須ノ宮、字中濱、字アジ釣場、右にセウブヶ根、字舟戸（当村舟置場）、左本村人家続百三十軒、右出崎片打、字赤岩鼻に至り終る。人家続の字マンゾウ、字弁天鼻、左山上に弁天ノ小社、本村人家字面ノ濱、左引込本村の枝郷山家の人家六十四軒、小流尻を渡、左山上に鎮守耳高明神ノ社、右に三ッ根、右に浅根（汐冠り）、右に烏帽子根、字竜宮崎、右に鶴ノ根、字田尻濱、田尻川、右沖に平根、右沖にコギ通り根、字大平、右に青クサ根、字ビシヤコノ丸山、小鼻（一周四十間許）、右沖に竹ヶ尻根、字竹ヶ尻鼻、（岩上昼休）、字鶴ノ糞鼻、右沖に小樽根、字仏鼻、右に青木鼻根、字ヤガ磯濱。右に烏帽子根、稲取村字不動濱、沿海打止終る。フ印を残す。それより乗船帰宿。恒星測定			
102	102	102	大図番号





27		2612	宿泊日・旧暦
(27)	昼休	(26)	(西暦)
八幡野村	赤沢村	大川村字入谷	宿泊地
同 伊東市	同 伊東市	同 東伊豆町	現・市町村名
名主八兵衛 百姓惣吉	禅宗清月院	庄屋常右衛門 百姓弥平次	宿泊宅
<p>特記・天体観測</p> <p>人家前舟置場、字磯辺、大川村字模木鼻、大川村人家統舟置場、字大川濱、小字南下に至て下田よりの往来添、沿海打止め大印残し終る。従是止宿測処打上。谷川小流（飛石渡）、左禅宗竜豊院、本村山裾の人家字入谷、即止宿名主常右衛門前象限儀の柱に繋ぎ終る。恒星測定</p> <p>豆州賀茂郡河津庄大川村内字南下人家前昨日沿海の打止大印より始め、沿海左山順測。小流尻渡、右山添に三島大明神社、大川尻飛石渡、字御神崎濱、滝下鼻、滝下、釣サリ鼻、右にウケズミ根、水草咲濱、右沖に雀島という大根、右に鯖根、川津庄赤沢村字中之崎、子ゴイ濱、右沖にシヨツコウ根、右に平島という大岩（周三間許）、字小根ノ鼻、西濱、小浦濱、赤沢村人家統舟置場、同所昼休、</p> <p>字小浦濱の内沿海打止め小印を残す。是より先大絶壁也。舟不寄無抛打止め。小印より山手へ向横切り街道測。右三島明神社、左禅宗清月院、（行先すべて屈曲坂を登る）、左小谷に添、是より下田道より根府川本往還となる。落合川、左に旧跡大幕山（山頂頼朝卿御狩の節帷幕を張せたまうという）、字天神ノ坂、左松室山の中腹旧跡髭水（清水溜三間四方。頼朝公髭を洗いたまう旧跡）、当村名産楊梅樹多し、字天神松、名産黒ボク石（此山より出し東都へひさぐ）、此辺名所赤沢山、字浮山、字柏ヶ峠、葛見庄八幡野村字向イ坂、旧跡右杉林方一町四方、字角力場（真田僕野相撲場也）、左道端旧跡（川津三郎墓苔むしたる古墳也）、旧跡字馬の足跡（往還埋石馬蹄二つあり。頼朝公馬蹄石とい伝）、字大アラレ、字石投、名所字投石（左山の麓にあり。真田僕野石投せし旧跡）、名所（左山の上に真田投返し石、周四五抱計の石二つあり）、名所天神力、岡八幡三郎（古城跡、左山裾林あり。此内天神社あり。古彼人の屋敷跡という）、左天治川添字岳ノ上、右庚申塚、左右人家中止宿測処、旧年も同所なり。下田より根府川往来に離れ海辺へ出る。海岸舟置場、字下之濱に至て下印を建置、街道横切終る（追て沿海の繋ぎ印）。恒星測定</p>			
一〇一	一〇一	一〇一	大図番号



29	28	宿泊日・旧暦
(29)	(昼休共28)	(西暦)
同	八幡野村	宿泊地
同	同 伊東市	現・市町村名
同	名主八兵衛 百姓惣吉	宿泊宅
<p>八幡野村逗留測。乗船、加茂郡川津庄赤沢村人家下字小浦濱の内小印より始め、左山沿海順測。是より先海岸大絶壁足掛なし故に無抛、山の半腹海岸添を行。字小浦濱(当村舟置場)、字通り戸鼻、左右切岸九十九尺余楊梅茂る中、或は松林中を行困り道甚危し。字高良山崎、字持仏穴、右岸下に汐冠り端ヶ根、字端ヶ根、葛見庄八幡野村字端ヶ根鼻、鵜ノ糞、右岸下に鵜ノ糞穴、夜根(ヨネ)、焼場鼻、夜根焼場、碁石濱に至て沿海石印を残す。行先大岩石舟難寄故に山越して止宿に戻り昼休後逆測す。止宿昼休後、又同村内字下ノ濱人家下(昨日街道打出し残す)下印より始、沿海右山逆測。右人家下小石濱舟置場を行。右山根に浄土宗称名院、山根通り人家中より出る。今治川尻渡、字竜神崎、右松林中に竜神ノ営、字榎木ノ鼻、右入奥の字平濱、右湾字吹流出し、右に雀島、字山海鼻、小穴、松下鼻、碁石濱に至て、先刻の残し石印に繋ぎ順逆合測終る。帰宿。恒星測定</p> <p>八幡野村滞留測。無測乗船にて行、豆州賀茂郡富戸村・八幡野村界、下印より始め、沿海右山逆測。字大浪立鼻、是より行先海岸、当国第一の難所絶壁、手掛足掛なし、無抛海添の山を引く。左沖に二町島、字小浪立鼻、大島濱、左に大島根という出鼻、田之尻濱、観音ヶ根鼻、イカイガ根鼻、丸根鼻、左に丸根、ヒアイガ濱、左にヒアイガ島、ヒアイガ崎、長根鼻、左沖に鷗根、長根濱、左沖に枯松島、枯松鼻、小平根濱、小平根鼻、豊ノ磯、豊ヶ崎、褥崎、テンマノ尻、赤根崎、赤根濱、ザコリ鼻、イケズミ濱、イケズミ鼻、大バヘノ濱、大バヘノ鼻、大師穴、字大ハヘ根、小バヘノ鼻、小バヘノ濱(右に大師穴という大穴あり)、提網鼻、提網濱、カサガネ濱、橋立濱、オタツガ磯、狭戸、乗船根鼻、左沖に沖ノ前ノ島根、左にイモ穴根、字犬落し、左沖にヨシバヘ根、字水ヶ尻鼻、水ヶ尻濱、左沖に地前ノ島根、右山下に薬師穴という大穴あり(中に薬師堂あり)、字上平尻濱内に水印を残。是より沿海街道両用右人家前を行、右網代木、字下ノ濱に至て沿海街道の残下印に繋ぎ、沿海逆測打止め終る。</p>		特記・天体観測
一〇一	一〇一	大図番号

		文化12年12月	宿泊日・旧暦
2	1	(西暦)	宿泊地
(31)	(12.30)	昼休	池村
富戸村	八幡野村	静岡県伊東市	名主半蔵
同 伊東市	同 伊東市		名主次左衛門 百姓惣五郎
八幡野村出立。豆州加茂郡葛見庄八幡野村字岳人家前追分三辻、三印より始め、根府川街道測量。右制札、左稻荷社(人家限り)、字延命坂(左に延命松という大樹あり)、岡田ヶ窪、ザラミキノ坂、此辺の高山霊峯大川岳、左にザラメキの松という大樹あり、字美津窪、追分四辻(右富戸、左池)村道石碑に繋ぐ。直直に本街道和田へ向て行、此辺峠なり。天気清明、諸島遠測。字ゴセ林、字峠下、字大石上峠、富戸村字法花塚(右に経塚あり。諸山眺望)、右富戸村へ行道あり、字梅ノ木平、吉田村界に田印を残。是より十町許無測。同村名主にて昼休後逆測して此印に繋連綿す。又根府川本街道筋吉田村字伝馬場、大池打上追分にテ印を建置。本街道逆測。右制札、是より山越、左富戸村へ行小道あり、字地窪平、即両村界残置田印に繋ぎ逆測終る。それより無測にて富戸村に着。恒星測定		又八印より初め、池村山湖へ測量。天治川大斜に渡、又人家中天治川を渡る。字小坂、荷土ヤラ、サカ坂、葛見庄池村、右に浅間山(又大室山とも)、此頂に浅間宮、池村人家散在、五八軒、左に矢筈山、右庚申塔、字松木坂、右三島へ行道、左池尻渡、池尻斜渡(板橋)、池手前橋迄測る。同村池端に至て打捨終る。池村山湖、溜り水にて大雨の時甚し。水はき場なき故新開不成池尻葭生り。形ち琵琶湖に似たり。総測数一里二町四十九間。それより戻り同村にて昼休み、元の道を無測にて帰宿。恒星測定	一〇一
一〇一	一〇一	一〇一	大図番号



3	宿泊日・旧暦
(1. 18 16 1)	(西暦)
富戸村	宿泊地
同 伊東市	現・市町村名
名主次左衛門 百姓惣五郎	宿泊宅
<p>富戸村滞留測。豆州賀茂郡富戸村(去月二十九日逆測残し)ト印より始め、沿海左山順測。是より同村内蓮着寺、字二町鼻、二町濱、右に揖ヶ根、字日蓮崎(又上人崎とも)、旧跡(同所絶壁に日蓮上人鎌倉よりウツロ舟に召れ、此所に漂着したまう。同所に筆を投、八字の妙号を書きたまう故に題目石として山下絶壁に其跡残るといへども不見。石玉垣あり。右漂着の時、川奈村舟守り弥五郎なる者、漁に出て見奉り舟に具して川奈に戻り、岩窟の内に招じ、其後和田の草堂に送り奉るという。大磐石面書判の所今損したり。往事の物語。且縁記あり)、此辺名所笹海ヶ浦という。出鼻瀬中に名号の八字浮ぶという。水面へ筆を投じ書きたまうとなん。</p> <p>右山上に祖師堂あり。字水ヶ崎、字押送り濱、横物打上本堂迄測り、石坂を登り寺境内に終る。法花宗越後本乗寺末海岸山蓮着寺、旧跡ヶサ掛松あり、字広濱、綱切崎、右沖綱に切島根、字平根鼻、右沖に平根、字新海苔口鼻、字北風陰(ナライカケ)、右沖に大島根、字北風陰下濱、字鶴ノ糞崎、字門脇鼻、右沖に燕島根、字文殊ヶ根鼻、字二股根崎、大ツル崎、小ツル崎、前門鼻、ボラ取濱(同所野昼休。同所漁舟置場)、字鷹ノ鼻、鳥賊ノ鼻、左岩上ボラ納屋、左山の半腹に名所御越山松、字スキ根鼻、右沖に(汐冠り)団子根、左畑中上に字柳の人家散在す、字大柳濱(舟置場漁舟多し)、字小柳濱、字脇ノ濱、左八幡野村へ行追分石牌あり、字鶴取石沢、右沖に鶴取石根、左高山裾海添村道筋、字釜屋濱に至て沿海打止め力印を残。従是止宿打上。左山根当村水汲所、右禅曹洞宗清富寺、左右本村人家統八十二軒、左山上に字岳の人家十七軒、右制札、左引込鎮守(三島明神・若宮八幡)合殿社、左本街道へ出て追分あり。人家中止宿測所に繋。</p>	
一〇一	特記・天体観測 大図番号

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
6 1	( 4)	和田村	同 伊東市	名主新左衛門 百姓代角右衛門	川奈村滞留測。乗船、川奈村地内字釜屋濱カ印より始め、左山沿海順測。字小根ノ鼻、大根鼻、左入江の字はツバネ濱、左引込字中島鼻、字ツバネ濱、中山鼻、鵜ノ根鼻、神楽根鼻、左引込入奥字虎ヶ磯(同所同名の根あり)、字長根鼻、短根鼻、畠ヶ尻鼻、雀島鼻、雀島、馬取場鼻、惣名字郷戸鼻、小濱、高磯、沢尻、真願磯、細腰石濱、岩上昼休、ゴロ台根鼻、ゴロ台濱、君ヶ平ノ崎、字クンダヶ根崎、吉田村・川奈村入会論所、左赤入道沢、字鯨濱、長草鼻、日陰濱、小松ヶ根鼻、右に小松ヶ根、字オレウケケ鼻、川奈村字オレウケガ濱にヲ印を残、沿海打止終る。それより乗船、川奈村に着。恒星測定	一〇一
5	( 3)	同	同	同	川奈村滞留測。乗船、川奈村地内字オレウケ濱ヲ印より始、左山沿海順測。字通り戸、平岩鼻、水ヶ尻濱、水ヶ尻鼻、右沖に鵜根、右に鵜根ノ小、横濱、ロウマ尻鼻、ロウマ尻濱、赤根鼻、長濱、馬ノ背崎、オソロシ、オソロシノ輪、オソロシノ鼻、石取ノ輪、石取濱、石取鼻、右沖に西島根、ハヘ崎、川奈崎、左灯明堂繋ぐ。左恵比須の小社、小網代(昼休)、川奈湊入口、字高磯、横濱、小浦崎(字小浦舟入湊。人家谷奥まで七十三軒)、字玉ノ木、左山上に禅宗慈源院、本村人家統、左山上に日蓮宗蓮慶寺日蓮堂、是より止宿打上測処に繋ぐ。本村人家ノ百十九軒。字下ノ濱根先(人家限り)、字横磯、右沖に黒根、字小濱、右沖に姥島、左引込岩窟の字姥子穴、姥明神小社、字居合濱に至て沿海打止めイ印を残す。それより乗船、帰宿す。	一〇一
4	( 2)	川奈村	同 伊東市	名主四郎左衛門	富戸村出立。富戸村地内字釜屋濱カ印より始め、左山沿海順測。字小根ノ鼻、大根鼻、左入江の字はツバネ濱、左引込字中島鼻、字ツバネ濱、中山鼻、鵜ノ根鼻、神楽根鼻、左引込入奥字虎ヶ磯(同所同名の根あり)、字長根鼻、短根鼻、畠ヶ尻鼻、雀島鼻、雀島、馬取場鼻、惣名字郷戸鼻、小濱、高磯、沢尻、真願磯、細腰石濱、岩上昼休、ゴロ台根鼻、ゴロ台濱、君ヶ平ノ崎、字クンダヶ根崎、吉田村・川奈村入会論所、左赤入道沢、字鯨濱、長草鼻、日陰濱、小松ヶ根鼻、右に小松ヶ根、字オレウケケ鼻、川奈村字オレウケガ濱にヲ印を残、沿海打止終る。それより乗船、川奈村に着。恒星測定	一〇一
同	同	同	同	同	川奈村出立。乗船無測にて行、豆州賀茂郡葛見庄伊東郷川奈村字居合濱イ印より初め、左山沿海順測。字力ニラ鼻、右沖根、右に汐冠根並て二、右瀬続小間通り島(頂松生岩島也)、それより右に大間通り島(岩島頂上松生)、右間通島に続たる小鼻あり、右沖に平島根、字カシラ濱、新井村界論所也、右沖汐に冠り根、右沖に小岩あり、字鷹ノ巣鼻、字前カシラ濱に至、横切の為カ印残す。是より横切測。字汐吹濱に至シ印を建置。又カ印始め、沿海測量。字汐吹鼻、右沖に屋根、字汐吹濱シ印に繋ぐ。是より沖、手石島、小手石島(遠測)、字平島湊、右沖に平根字蛇根濱(舟置場)、(右出張飛瀬)蛇根という、	一〇一



7 1		6 2	宿泊日・旧暦
(5)	昼休	(4)	(西暦)
和田村	吉田村	和田村	宿泊地
同	同	同 伊東市	現・市町村名
名主新左衛門 百姓代角右衛門	名主	名主新左衛門 百姓代角右衛門	宿泊宅
<p>テ印より下田街道順測。右川奈道追分、字水落し口、右川奈道追分、左一里塚、和田村界論所、字常等字ケ平、右川奈道追分、逆サ川土橋、字千頭坂（左右田地、此辺都て伊東入道古城跡構内という。然れども其跡なし）、左に伊東入道墳墓（三重塔梵字あり）、左に伊東氏物見の旧跡（松あり）、字惣堂坂、左に山上旧跡惣堂（日蓮上人川奈より此所へ移り三ヶ年居たまい伊東八郎左衛門此所移せしという）、本堂（祖師安置。側に五輪堂祖師墳墓あり。寺号無本寺海光山仏現寺）。</p>	<p>和田村滞留測。吉田村地内大池周測量。始印を建置（一周繋ぎ印なり）、右山奥十足（トタリ）村地内鎮守山の神社、式内引手力命神社。左池の中御姫島（松生）、左無名島。右に樋あり、是より右萩村田地へ引水也。往昔、伊藤入道此水を引たる由、池端に樋の虧（かけ）石あり。字堂屋敷、左に小島あり。左に無名島。左池端水量石（伊藤入道水落しの量石という）、字クビレ、是より大池小池の続き狭き所を引渡す。すべて大池小池一統也。同所小池端に至て小印を建置。小池、葦多し。是より矢張大池端測量。始印に繋ぎ大池一周終る。又大池小池引渡の小印始め本街道へ向て打下、小池添測量。小池半周の限り字池ノ坂、池ノ坂峠、右萩村道追分、本村名主宅昼休、右日蓮宗宝永寺、字伝馬場に至て当月二日残し置テ印に繋、大池より打下測量終る。</p>	<p>字白砂、前山濱、二ツ沢濱（左に二ツ沢、左竜神の小社）、字宝島濱、千体濱（舟揚場）、右一向宗宝泉寺、是より海辺すべて人家続の後一筋に漁師町続往来あり。本村百五十二軒、右山の中腹に禪曹洞宗、宝洲山弘誓寺、同村内昼休、左引込浄土宗本然寺、和田村字和田濱に至て止所測処打下街道横切両用の残ワ印を建置。大川口（大舟此川内に入置）、松原村地内沿海打止めマ印を残終る。又ワ印に戻り始、止宿打上横切街道両用測。字八幡町、和田村内、左右人家町並、字井戸川町に至り三辻追分、右大人、左下田街道に出、井印を建置。是より一支測所へ打上。名主新左衛門前象限儀に繋終。恒星測定</p>	特記・天体観測
一〇一	一〇一	一〇一	大図番号

8	7 2	宿泊日・旧暦
( 6)	( 5)	(西暦)
冷川村 徳永村	和田村	宿泊地
同  伊豆市	同	現・市町村名
名主治郎左衛門 組頭林右衛門	名主新左衛門 百姓代角右衛門	宿泊宅
<p>輪番持五ヶ寺、右日蓮宗本真山竜隆寺、右同宗恵日山妙照寺、右同宗伊東山蓮上寺、左山根に同宗伊東山太行寺、同所同宗真巢栄山妙法寺、同所山根に同宗長沢山海舟寺、字中芝町、右下田道追分石碑、三辻に至る。字宿町、左右人家続町並、右道筋中芝町、大芝町より新井村の町迄続、左日蓮宗妙寿山妙隆寺門前、左引込浄土宗浄円寺、三辻町中字井戸川町に至て、右大人、左下田街道に出、昨日残置井印に繋ぎ、下田より根府川街道測量終る。それより帰宿。 (当村内熱き温泉二三ヶ所あり) 恒星測定</p> <p>雪霰、無程止。和田村出立。和田村内字井戸川町追分(右大人、左下田)街道井印より始め、大人街道測量。左引込輪番五ヶ寺の内日蓮宗海上山仏光寺、(此辺すべて小溝温湯流る)、左十王堂(小溝向竹の内村人家、矢張井戸川町の内)、竹の内村、右根府川街道追分(海添にあり)、右引込温泉馬湯共六壺あり(至て熱湯)、同村人家続二十九軒、岡村本村(人家続、名上の坊四十八軒在す)、旧跡(右引込音無之森)、当時同村氏神。合殿、音無明神、山立神二社。又此社後の先大川流、此所を音無ノ瀬という。同村内字温泉人家八軒。是より一支神社打上、山上鳥井前に至る。同村内式内久須美神社(稻荷大明神と崇む)、神名帳久豆弥神社と書。是より、左亀ノ山、秋葉明神社あり。右畑中旧跡日暮の森、頼朝公姫と通じ、此所に黄昏を待矢(ちか)いたまう。</p> <p>大川(又岡中)土橋、左谷奥松山、鎌田村内鎌田兵衛正清古城跡という。左谷奥同村愛宕の森、式内久年須美神社、右山根岡村枝広野(人家添十二軒許)、右に弁天小社、是より山越左右凹道、右沢添字横峠、左道下は鎌田村地添字栢峠平、此所山印を建置、即山測の合印なり、右小川沢跡の方へ斜に引込、池二つあり。道下鎌田地先限り。徳永村、同所峠野昼休、是より下り坂、字白坂、字水吞下、沢打川、又同川渡、又同川渡、字大野平、(此辺少し田地)、又同川渡、又同川渡、又同川渡、左稻荷社、宇唐羽松、本村前に至て羽印を建置、大人街道打止終る。止宿川向三町許隔。</p>		特記・天体観測
一〇一	一〇一	大図番号



10	9	宿泊日・旧暦
(8)	(7)	(西暦)
城村	柏久保村字中嶺	宿泊地
同 伊豆市	同 伊豆市	現・市町村名
名主五左衛門 百姓常右衛門	百姓太兵衛	宿泊宅
<p>冷川村出立。徳永村字唐羽松羽印より始め、大人街道測量。人家字キョウニユウドウ、小流板橋、谷川仮橋、冷川村、左谷川向山裾徳永村内人家前山ノ神森、式内石(イワ)徳高神社かと疑。右冷川向字尻戸、右川向山根枝持越人家散在、柳瀬村、左川向八幡村地内、同村内左に當時愛宕山(大見小藤太古城跡とい伝)、冷川仮橋、川中央界、八幡(ハツマ)村、左川向谷奥に柳瀬村人家散在、左に冷川・大見川落合、水上天城山より来る。是より大見川という。川向八幡村人家散在、左八幡村へ行道追分に至り上印を建置。最勝院へ行為也。左川向梅木村人家、城村、左に来客の森、左山根字横山人家、向イ川仮橋、又同川仮橋、川中央界、関野村、柏久保村内古城跡愛宕山(伊勢新九郎出張城とい伝)、左太神宮の森、向イ川関沢橋渡、中界上白岩村、同村人家中昼食、日蓮宗一乗寺、左川向上白岩村字小川人家散在、左川向に姫御前宮社(式内小川出見神社)、左川向字久保人家、右山裾下白岩村内字西見堂、左川手前同村内字汐水人家、川向左田方郡田方村人家、右谷奥小川筋郡界(右下白岩村、左年川村)、字和田人家、同村内川向山の半腹字坪の内人家、別流年川土橋斜に渡巾、上白岩村、下白岩村田地入交故に無界、川中央界、賀茂郡下白岩村、田方郡年川村、左川向門野村人家、柏久保村、右引込曹洞宗城谷山天桂寺、左に大見川、狩野川落合、(是より狩野という)、左に下修善寺の枝横瀬村人家、神益村古城山、古川土橋、右谷奥柏久保の枝古川人家、枝古川より谷奥、大野村に鎮守不動明王、式内倭文神社、左狩野川添、左天神の森、界柏久保村街道打止天印を残す。それより無測にて止宿着。</p>		
一〇一	一〇一	特記・天体観測
一〇一	一〇一	大図番号

宿泊日・旧暦			現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(西暦)						
1 1	( 9	和 田 村	同  伊 東 市	名 主 新 左 衛 門 百 姓 代 角 右 衛 門	城村出立。無測にて、賀茂郡大見郷宮ノ上村地内最勝院本堂前より始め、打下げ測量。往古より寄附。従御当家大猷院様御代頂戴御朱印高拾七石六斗。宮ノ上村内境内竹林竹木諸役等免除。奥行一里、巾八町、此地二千八百坪。相州関本大慈院未妙高山洞家最勝院、当山末寺及孫末玄孫末共合凡一千余ヶ寺。開基、関東管領上杉憲清開山吾宝禅師。上杉家墳墓及系譜ありという。本堂十二間、八間より始、左右廻廊楼門あり。小池の中央橋、左弁天小社小島あり。惣門を出る。左制札、左下馬札、黒門を出る。寺限り杉並石坂あり。左山裾梅ノ木村字堂ノ前人家、梅木村、川向柳瀬村人家、大見川仮橋、川中央界、柳瀬村、左大見川向地の神森あり、右引込日蓮宗東光山実成寺、左右人家、冷川渡、中央界、八幡（ハツマ）村、冷川、大見川落合、是より大見川という。同村内本街道に出て上印に繋ぎ打下終る。それより無測、冷川村名主昼休。柏峠越、伊東郷和田村の止宿に着。	一〇一
1 2	( 10	宇 佐 美 村 字 留 田 字 新 宿	同  伊 東 市	名 主 八 郎 左 衛 門 百 姓 武 兵 衛		一〇一



1 4 1	1 3	宿泊日・旧暦
( 1 2 )	( 1 1 )	(西暦)
熱海村	網代湊宮町	宿泊地
同  熱海市	同  熱海市	現・市町村名
本陣名主渡辺彦左衛門	組頭七右衛門 百姓代佐吾八	宿泊宅
<p>特記・天体観測</p> <p>宇佐美村出立。宇佐美村地内宇新宿濱測処シ印より始め、左山沿海順測。鳥川尻(川上亀石峠より流る)、字留田、字留田濱、字湊濱、左山根禪宗海向山斎秀院、左字湊、字築湊(波戸内漁舟数艘あり)、字腐(フ)海苔鼻(またヒジ曲り共)、字大崎、右沖にチヨンホリ根、(是より総名外浦という)、字大崎濱、右にカワゴ石、字高磯、右沖に釜根、外浦ノ滝(巾三尺計高一丈計)、右沖に二ツ根(二つあり)、字長根鼻、右に長根瀬続、字黒バヘ鼻、右床根字大尻崎(また床根鼻共)、網代村、矢張惣名外浦、字屏風岩鼻、屏風岩出張二十間許、右沖に弥十郎根(其側に汐冠り根あり)、立島(岩島)、絶壁の字赤岩、左竜神ノ社、字竜神濱、左日蓮宗広栄長延寺、字長延寺濱、左浄土宗安養寺、左同宗嚴昌院、惣名網代浦、字築島(丸石波打出張)、舟置場(漁舟あり)、左本村人家添字町場、宮崎町、右に波石丸石出張字江川崎、網代湊(入江深く何風にても舟掛りよし)。町筋三通りあり。人家凡三百軒余。宇宮町入奥に至て沿海打止宮印に終る。是より測所打上、宮町の内四辻測所に至る。恒星測定</p>		
一 〇 一	一 〇 一	大図番号

1 5	1 4 2	宿泊日・旧暦
( 1 3 )	( 1 2 )	(西暦)
同	熱海村	宿泊地
同	同  熱海市	現・市町村名
同	本陣名主渡辺彦左衛門	宿泊宅
<p>特記・天体観測</p> <p>字町場下、此辺石切多し、東都へ出し鬻ひさぐ。此沖に小根並て二ツあり、字不動濱(右山上森中不動堂)、梅ノ沢に小流、左梅ノ沢あり、熱海村(是より先絶壁なり)、字小曾賀濱、右沖汐冠り無名根、並て又一ツ、左に大穴あり、左入奥に岩窟中観音堂、字観音浄土という、左岩窟綿の岩屋という。向て抜け穴あり。其前に舞台根という平根あり。伝曰く、此窟中旭入て輝故号(なずく)。字轂鼻、左綿穴の行拔、入奥の字水浪、字長ノ登呂鼻、右地宗代根水冠り、右沖に宗代根水冠り、字長トロノ入字烏帽子根鼻(右烏帽子根)、又並て小烏帽子根、右沖に兜根、字基盤鼻、左絶壁上に基盤石あり、左山上魚上小屋、右弁天根、左納屋一軒、左舟揚場(漁舟あり)、同村字釜ヶ根濱に至る沿海打止め釜印に終る。それより乗船にて止宿へ着。</p> <p>熱海村滞留測。無測にて、熱海村字釜ヶ根濱釜印より初め、左山沿海順測。惣号片平浦字八幡下濱。左山上八幡宮社、和田川尻、見掛り左山裾左往来海手より引続枝和田の人家散在。此山手より往還に出海辺に添て行、字和田濱、枝水口の人家(山手散在)、初宇川尻、糸川尻、熱海濱(人家添舟置場)、左道筋町並、即三島街道分止宿測所打上の為此所にア印を建置。本村人家添限根府川街道に分(左山手の方にあり)、字横磯濱、右舟置場、伊豆山字松ヶ下濱に至る沿海打止山印を残終る。又熱海村字熱海濱ア印初め、三島街道及止宿温泉打上測量。(左右本村人家町並百軒計。総家数四百軒計)。字下宿、(右人家温泉屋、左同の温泉屋あり)、右引込山上禅宗疏黄院あり、四辻(右根府川、左下田)道の横道あり。近道故当時多く此道を往來す。字上宿、即止宿前に突当り上印建置、三島街道終る。是より測処打込。即、本陣名主宅内象限儀に繋ぎ終る。当温泉湯場。熱湯汐入中熱すべての事自在なり。何病にもよし。温泉壺数多し。六ッハッ七ッ昼夜六度大熱湯となる。此亭離れ家上段の間等多く座敷あり。当所名産雁皮紙並挽物等なり。各一覽、帰宿。恒星測定</p>		
一〇一	一〇一	大図番号



1711	16	宿泊日・旧暦
(15)	(14)	(西暦)
伊豆山字新磯濱	熱海村	宿泊地
同 熱海市	同 熱海市	現・市町村名
中田屋喜八 若松屋源七	本陣名主渡辺彦左衛門	宿泊宅
<p>熱海村滞留測。熱海村字上町上宿止宿前、海辺より打上残す上印より始め、三島街道測量。左湯本（温泉熱湯涌上る。但、昼夜六度涌上る）、右湯前神社、右に法花宗通広山大乗寺、引込右水車、右地藏堂、左海辺へ下る道家統き、山手七面ノ社、当村鎮守来宮一ノ鳥居前（左神主家）。是より引込本社森中にあり。字四面塔（円妙吉祥海雲、左三島道）、是より日金山地藏堂迄一里半という。日金山名所旧跡多し。左道下（糸川、石割川）落合。何れも小流糸川という。糸川、字石割、字物見塚（初島、大島真直に見渡す）、初尾川の水上字小川を渡る。右日金山道追分、字峠（右に地藏堂あり。其側に堂守の家、是より下坂なり）、軽井沢村、字ゾウシ場に三島街道打止ソ印を残し終る。それより峠に帰り堂守家にて昼休。帰宿。此夜大風烈。恒星測定</p> <p>熱海出立。無測にて、伊豆山内地内（去る十五日残し）字松ヶ下濱山印より始め、左山沿海順測。字二重浪濱、忍ブガ根、字忍ガ根濱、右に鵜ノ根あり、字クグリ岩、長根鼻、右に平根、字弘イ濱（舟揚所）、字赤井谷、濱手の人家（温泉屋あり）。不動濱より此辺都て冬中海苔を取献す。名産伊豆のりという、逢橋川尻、此川上四十町許神領の内蔵摩獄より寺山岸谷を経て南流して海に入、字新磯の濱、人家温泉屋前、沿海打止め新印を建置。従是伊豆山権現打上げ。（温泉屋六軒海岸に添あり）。従是登坂字行者ノ坂（屈曲）、字下見越（オリミコシ）坂、左熱海へ行小道あり、字下ノ宮、境内庫裡前左右小社、向て左（右桜童子、中十五王子、左護湯童子）合殿、同右（右幸夷童子、中七尾大明神、左岩童子）合殿、馬止め木戸、赤井谷人家小道、中央法経塔、下ノ権現という。左右本社あり。薬師如来、観音菩薩堂、並て左講堂、右中堂あり。是より坂登一直に引、（左本道屈曲坂あり）、坂上少し平地、左鐘楼あり。竜頭古鐘、高さ六尺、径し四尺、厚四寸余。銘不分明、鑄日、元徳三年二月日執筆上々執行権、大僧都広意、大匠相州森庄一色村和泉権正常利。此所の字常行堂（左に地藏堂、左に役行者堂）本道にあり。左に岸川、逢染川落合。同所に橋あり。大橋川という。大橋という。</p>		特記・天体観測
一〇一	一〇一	大図番号

1712	宿泊日・旧暦
(15)	(西暦)
伊豆山字新磯濱	宿泊地
同 熱海市	現・市町村名
温泉屋中田屋喜八 若松屋源七	宿泊宅
又坂登り、字石場坂という。左泉蔵坊（無住）、左引込名所古々井ノ森、この内に雷電社あり。左本地坊、左福寿坊、左円蔵坊、右真乗坊、都て無住。石段登り終、三辻追分あり。三辻（右小田原街道、左字下道の人家。左下田通り、此所より熱海へ。右字東谷の人家）、右制札、左右駒寄せ門あり、石坂登り一ノ鳥居、坂登り二ノ鳥居、右雷電宮、左番所、左鐘楼（古鐘、銘天文十五年とあり）、広前に至る、境内二町許（平地の後木生山高し）、左荒神社、左右石の玉垣を入、社頭広前に至る。本社前に止終る。式外天下第二の惣廟関東惣鎮守走湯山東明寺明鏡院伊豆御宮、神体千手観音と僧家にて崇む。御当家関原御一戦御利運御祈禱後神君百石を増し賜り。都合三百石拝領、御朱印案山林竹木境内諸役免除、鎮座年歴、仁徳天皇二十七年己亥八月五日、別当般若院、役寺二ヶ寺（正覚院、東福坊）、般若院末一山の菩提所成就坊、御宮内絵馬額多し。内陳左右アウンノウンノ獅子、神鏡幣帛御戸帳あり。御宮寂奇麗なり。尊く寛ゆ、左本地堂、本尊、阿弥陀如来。此後に御供所、右弘法大師堂あり。礼拝終て下行、海辺走り湯温泉屋止宿で昼休。走湯、湯壺凡七ツ所、前山洞の中より湧出る所鳥居建。滝樋竈にて流下る。其側に冷水涌出るあり。湯加減よし。樋口より滝となり。温泉壺に入、湯本尤熱し。酒杯爛をするという。温泉壺方九尺計なり。又字新磯新印より始、沿海仕越測量。左止宿測所（山上にあり）、左引込山形中に字赤イ谷人家散在、字新磯鼻、字小濱、（名所古歌あり）、前鳴沢川尻、沖鳴沢川尻、左門川村へ行小道あり。右に比久根字黒岩崎、右に黒岩、右に弁天島、右沖に弁天島沖ノ根、左山上に宮ノ上村枝稻村家六軒、字稻村下濱に至て沿海打止め下印を残す。それより乗船、無測で戻り伊豆山字新磯濱走り湯に帰宿。恒星測定	
一〇一	大図番号

1911	18	宿泊日・旧暦
昼休	(16)	(西暦)
宮上村字湯ヶ原	吉濱村	宿泊地
同 湯河原町	同 湯河原町	現・市町村名
市右衛門	名主彦右衛門 百姓源兵衛	宿泊宅
<p>伊豆山新磯濱立。伊豆山宇稲村下濱下印より始め、左山沿海順測。左山上より稲村川尻、同所村上り坂あり、字幕子濱、左高山上シビ見番あり。字小句戸(グロ)濱、名所字小句戸崎、字大句戸濱、字石払濱、字黒根崎、左小田原街道添。字石払という石置場(此辺の山より土台多く切出し江戸へ出し鬻(ひさ)ぐ)、字千年堂下濱、左に千年堂あり。門川(門川村にては西川と唱う)、川中央国界。相模国足柄下郡土肥郷門川(センカハ)村、惣名袖ヶ浦、左街道筋人家町並、昼休(但小田原領役人。江戸御用状持参)。是より湯ヶ原村、温泉打上げのためユ印を建置。吉濱村洪川尻、新崎川尻、字西人家添右に砂濱、海底長岩、惣号土肥ノ浦。左森中引込禅宗海福山宗徳院あり。左引込午頭天王社鳥居建、左止宿測所に至て沿海打上止印を残終る。恒星測定</p>		
特記・天体観測	大図番号	
101	101	



2 1 1	2 0		1 9 2	宿泊日・旧暦
昼休	( 1 8 )	小休	( 1 7 )	(西暦)
岩村字大浦町	真鶴村	真鶴村字鵜ノ根鼻	吉濱村	宿泊地
同  真鶴町	同  真鶴町	同  真鶴町	同  湯河原町	現・市町村名
名主万蔵	名主清左衛門 名主半左衛門	田代与次兵衛	名主彦右衛門 百姓源兵衛	宿泊宅
特記・天体観測				
<p>（昔古、水戸黄門公此所に来り温泉に浴したま いしとい伝う）。温泉壺方四尺計、加減よ し。即此温泉江戸廻りとなる。株持江戸に三 家。即谷奥は四方高山にて田地人家とも是より 先なし。只樵夫（きこり）の通う細路。小田原 箱根辺へ山越の道ありといえども、至て難所 にまゝ往来も絶たるといふ。昼休、温泉借屋。 それより無測願城寺にて土肥氏の墳墓を見て帰 宿。</p> <p>吉濱村出立。吉濱村測所前ユ印より始、左山沿 海順測。左測所迄二十四間計、左小田原街道・ 福浦道追分あり。是より本街道に離る。左山添 に小庵あり。其側宇飛地蔵堂あり。昔古右大 将七騎落の時、此庵室に隠れ、大場三郎追打の 危難のがれたまう旧跡とい伝う。字舟付、宇 多板崎、左に寺一軒あり、宇多板濱、福浦村 （旧名新井村といふ）、字福浦、字沢向（人 家）、水無川尻、左山手に宇神田の人家、左上 に吉濱村枝川堀の人家、舟置場字松、右に湊 根、釜根、右竜神鼻（また清水根崎共）、字桂 子濱、右字次郎瀬鼻、真鶴村、字鵜ノ根鼻、右 に鵜ノ根、飛州ホラ漁出張田代宅にて小休、</p> <p>宇引掛ヶ浦、同所納屋舟揚場、宇尻掛ヶ鼻、宇 入窪下、宇大濱鼻、宇大濱、横切の為大印を建 置。宇乗口、宇道無し鼻、宇道無し濱ミ印を残 す。宇黒崎、宇内フクラ、同所野昼休、宇亀ヶ 崎、宇番場浦、真鶴崎（此辺第一の出崎な り）、右に笠島（隠れ瀬続き）、右沖にサガシ ヤ根、宇津イジノ濱、宇ツイジノ鼻、右岸下猿 猴岩（狩（カナ）岡という人、猿猴二足岩に書 付たりといふ）、字恵比須鼻、入奥の字釜ノ 口、字ツブネ石鼻、字二番ヶ鼻、字里地ノ濱、 字コトウ濱、右に平島根、同所沿海打止めト印 に終る。それより無測。真鶴村へ着。</p> <p>真鶴村出立。無測乗船、真鶴村地内字コトウ濱 ト印より始、左山沿海順測。右沖に鈴島（岩島 なり）、右に無名根（立岩也）、字水尻鼻、宇 宮ノ前濱、右沖に鵜ノ根（官ノ前、鈴島、是よ り一町計沖。岩島なり）、左に貴之宮右に鯛納 屋老軒。宇宮ノ前濱内に宮印を建置。是より向 海へ横切。左右納屋二軒、宇大濱、向海昨日の 残し大印に繋ぎ横切終る。</p>				
九九	一〇一	一〇一	一〇一	大図番号

2 2 1		2 1 2	宿泊日・旧暦
( 20 ) 昼休共	( 19 )	昼休	(西暦)
同	根府川村	岩村字大浦町	宿泊地
同	同 小田原市	同 真鶴町	現・市町村名
同	名主長十郎	名主万蔵	宿泊宅
<p>又宮ノ下濱宮印より始、沿海順測。左舟置場、左絶壁下岩窟中、旧跡鴈ヶ窟という。此窟中昔時、頼朝公七騎落の節、此窟に隠れ危難を免れたまうという旧跡。惣号字真鶴浦。人家二百七十八軒。真鶴湊、大小舟百艘程掛る。南西風舟掛よし、袋の如き湊なり。入口より左の方に汐冠り瀬あり。是より沖に鵜根汐冠り、左漁舟置場。是より止宿測所へ打上。左右人家町並、左に制札、真直に引込浄土宗発心寺（山根あり）、即測所に繋終る。此辺より根府川街道まで凡十五町許。字磯崎の人家、字波戸場崎、字鈴島鼻、左沖湊口、鈴島、字白磯濱、字ドンドン鼻、小田原曾我山（此山より曾我兄弟登るといふ）、字大ヶ尻濱、岩村、字植木鼻、字植木（絶壁の名也）、本村字ウトウ坂、人家二百二十八軒。字大浦町並中昼休。（此辺都て石工多し。濱辺一面に切石なり）</p> <p>右沖に弁天島、右沖にシトトウ根汐冠り、絶壁の字鞍掛下、字赤濱、右沖に鵜ノ糞根、右沖に乙須根、右に飛瀬続大根、字赤濱崎、字新島濱、字新島鼻、字沢尻濱、字屏風岩鼻、字堂下濱、江浦村、左山上に観音堂、矢張字堂下濱の内沿海打止め江印を残し終る。是より山越屈曲坂を登り、根府川街道筋に出、江ノ浦村を越、根府川御関所を出て根府川村に至る。恒星測定</p> <p>根府川村滞留測。無測御関所を越、江ノ浦村より乗船海陸行、江浦村内字堂下濱宮印より始め、左山沿海順測。滝尻石濱中細流、字滝尻濱、海ヶ沢尻細流、字松崎、左山上八王子の神社、字江ノ浦、本村はより引上げ根府川街道左右散在。左山上に蔵王権現の社、字日ノ崎、此辺より根府川御関所役人出張、字葛津羅濱、御関所柵取付。根府川村、御関所外柵より御番所前まで凡四町許柵続き。但此柵通行だけ引解（とく）、海岸通行の趣申談、右に海底長根あり、右に黒根、字山下濱、根府川御関所内構御番所迄二町許続。但此柵は御要害の御構に付縄計り引通り、余は乗舟柵内へ廻り測量の積申談、無滞済。小田原持根府川御関所より御柵前通り測量。根府川尻、川上は聖山の麓より御関所と人家との間を流れ海に入る。</p>			
九九	九九	九九	大図番号

23		2212	宿泊日・旧暦	
(21)	昼休	(20) 昼休共	(西暦)	
小田原城下本町	早川村	同	宿泊地	
同 小田原市	同 小田原市	同	現・市町村名	
本陣片岡栄左衛門	組頭武左衛門	同	宿泊宅	
早川分水尻砂濱中、左早川村上石垣山（秀吉公小田原征伐の御陣跡）、本村内字木地引人家、左山根に車川渡、早川尻渡（連台越）、早川庄小田原宿山角町、左同町内字新土の人家、横手濱総名小陶綾の磯袖ヶ浦という。是より左すべて小田原宿一構となる。筋違橋町後手、左市中浄土宗稻荷山大林寺（後口向也）、此辺家中小路後口向、茶畑町、用水川尻、代官町、千度小路町、此所山測、即沿海の全尾。同町内是より東街道宮ノ前町へ向い制札へ繋ぎに行、右制札、木戸千度小路並、左右横町三辻に突当り大通に出る前ノ前町。従是東街道重測。旧測の当制札中央に繋打止め終。従是同町内止宿測所打上、左市場町横町、本町、本陣片岡栄左衛門門内測所に繋終る。書上案。小田原宿、往還長二十町六間。宿内総家数千五百六十九軒。寺院及町名等書上に譲りて省此。今日沿海惣全尾。恒星測定		根府川本村人家添、字根府川濱に根印を建置。是より測所打上左右村中を行、左熊野権現の社あり。真直に一町計行御閑所あり。街道此筋にあり、則止宿測所に至る。已前、根府川街道を測量せし時の旧測所と合す。右止宿昼休。此村上に根府川へギ石出る所二ヶ所あり。当所の産物也。外に土台石も出る。又根印に戻り沿海順測仕越。左にチョツキリ岩。同所人家限り。字根元濱、右沖に大根、字大根鼻（また黒根鼻共）、右竜王小社、字石取濱、右沖に隠瀬（浮瀬汐冠り）、字幸城ヶ根鼻、此平根より沖に飛瀬あり、字長根鼻、右にカイトリ根、米神村、長根鼻、同村内沿海打止め米印を残し終る。それより乗船帰宿。恒星測定		特記・天体観測
九九	九九	九九	大図番号	



30	29	28	27	26		25	24		宿泊日・旧暦
(28)	(27)	(26)	(25)	(24)	昼休	(23)	(22)	昼休	(西暦)
同	同	同	同	熱海村	初島	初島	熱海村	吉濱村	宿泊地
同	同	同	同	同 熱海市	同	同 熱海市	静岡県熱海市	同 湯河原町	現・市町村名
同	同	同	同	本陣渡辺彦左衛門	曹洞宗寿福寺	曹洞宗寿福寺	本陣渡辺彦左衛門	庄屋	宿泊宅
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。此夜星測納あり。恒星測定									
同所滞留。地図御用調。									
同所滞留。地図御用調。恒星測定									
同所									



「十一月二十九日 字大浪立鼻、是より行先海岸、当国第一の難所絶壁、手掛足掛なし、無<sup>よんどころなく</sup> 扱海添の山を引く」  
 『自豆州賀茂郡古佐美村至相州足柄下郡小田原宿沿海地図』（国宝：地図・絵図類 15）  
 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止



## その悦よろこび 知るべし

上総国武射郡 戸村 茂昭

享和元年

七月二日 朝より曇る 安房国洲崎村

ハツ頃着く 止宿名主仁右衛門

同三日 朝より曇る 夜晴れ間に

竜座や射手座など天の星を測る

同四日 朝より曇る 海面晴れず

富士や大島見えざる故に逗留

同五日 朝より曇天 故に方位を測れず

銚子港迄先触れ出す

同六日 朝晴れ、富士や天城の方位を測る

富士の方位 酉二四四

天城の方位 申一九四二

五ツ半後 洲崎村出立

同七日 朝より晴天なれど海上晴れず

故に方位を測れず

地を量りつつ 北朝夷村に着く

夜 彦星と再会せる織女等天を測る

同八日 朝より晴天なれど海面同前

故に方位を測れず

地を量りつつ 江見村に着く

以降、安房・上総・下総の沿海を

昼は地を量り 夜は天を測るも

山も島も見当たらす

故に、方位を測れず

量地による測線誤差の増幅を憂いつつ

・

同十八日 銚子港に着く

止宿田中吉之丞 雲間に少測

同二十日 朝晴れ、予は病氣  
同二十六日 晴天 早朝 日の出に  
犬若岬にて富士の方位を測り得たり  
方位 申一九二五

十九日より富士の方位を測らんと

日々手分けするも（中略）

濃氣多くして見えざりき

これにて洲崎より銚子港に至る

増幅せし測線誤差の補正

可能となれり

その悦知るべし

吾が病氣も 最早全快に及べり

此の日 奥州小名浜迄先触れを出す

右は、伊能忠敬『測量日記』享和元年七月二日から二十六日までの業務日誌を元にして、忠敬先生の持病を悪化させた伏線でもあり、一瞬で全快させてしまったほどの悦ともなつた伏線と思われる事情を加えて叙事詩としたものです。

実は、業務日誌の原文には、前記の叙事詩に表現した次の文節はありません。

「以降、安房・上総・下総の沿海を

昼は地を量り 夜は天を測るも

山も島も見当たらす

故に方位を測れず

量地による測線誤差の増幅を憂いつつ

（中略）

これにて洲崎より銚子港に至る

増幅せし測線誤差の補正

可能となれり」

本稿は、この叙事詩の詞書を兼ねて、現在の航空写真と殆ど相似形に見える精密な伊能図完成に至った量地における誤差の増幅とその誤差の補正を筆者なりに俯瞰する過程において脳裏に去来したさまざまなよしなしごとを綴ってみたものです。

### 伊能測量方法と誤差とその補正

#### 【導線法】

日本列島の形を大日本沿海輿地全図として表現した伊能測量では、日本全国津々浦々島々における沿海部分の境界線を屈曲している折れ線として捉え（図1）、その折れ線の直線部分の長さ $a$ と方位 $\alpha$ 、尺取虫の様相で全国津々浦々を測り通したのでした。

この作業を当時の言葉で量地、測量の仕方を「導線法」と言いました。

この導線法において、  
・直線の部分の長さは、一間毎に目盛が付けられた間縄と呼ぶ縄を使って「間」の単位で測り取り、  
・直線の部分の方位は、「度分秒」の「分」以下の目盛がないワンカラシンと呼ぶ測器で測り取り、「360度の30度毎を十二支に割り当て、その30度の範囲において「何度」に当たり、且つ「分」以下につ

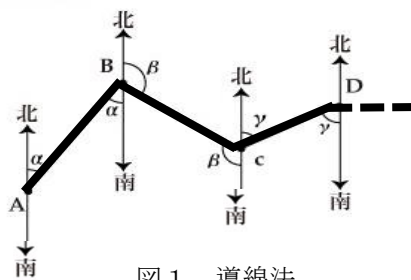


図1. 導線法



いては絵図仕立ての段階で10分単位に丸め込んだようです(図2)。

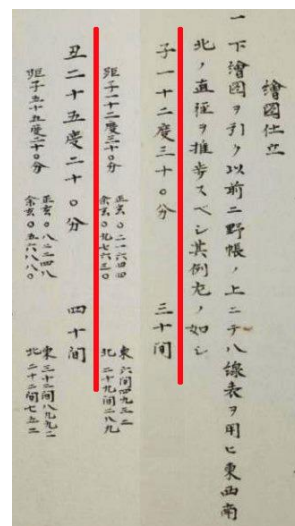


図2. 絵図仕立ての数値  
渡辺慎『量地伝習録』から

このような測器を用いた実測によって得られたデータを用いて地図とするに当たっては、例えば伊能大図の場合、尺間法の長さの実測値一町(60間・約106メートル)を一分(約3ミリ)とする3600分の1の縮尺で表現しました。

但し、**直線の方位**については縮尺することとができないので、「度」と「分」以下は目分量で「0分」か「30分」に丸め込んだ値で地図に展開しました。

### 【交会法】

導線法での方位は絵図仕立ての段階で10分単位に丸め込んだ値としたので必然的に**誤差が含まれていること**になります。

一方、距離は尺貫法の「間」の単位に丸め込まれた値を3600分の1に縮尺して地図として描くことから、一間が地図上では尺貫法の「毛」という極微細な長さ(約0.0303ミリメートル)となったので**誤差としては問題にはならなかった**ようです。

そのことから、図1の折れ線における直

線部毎の測量を尺取虫の如く続けていくと、方位の誤差だけが**増幅**してしまい広域の測量に及ぶと無視できないほどの誤差となつて測線が歪んだものとなつてしまします。その誤差を含んだ値をそのまま使つて作成した地図の測線は実際とはかけ離れた形状にならざるを得ません。

その**増幅した方位の誤差**を補正することを目的として、数日かけて実測したデータからなる広域な範囲の測線(図3の朱線)上の少なくとも2か所以上の地点から共通して見通せる遠方の高山への方位を、精度が優れた測器(度分秒の10秒まで読み取れる測器)で測り、増幅した誤差を補正しました。この測量を「**交会法**」と称しました(図3)。

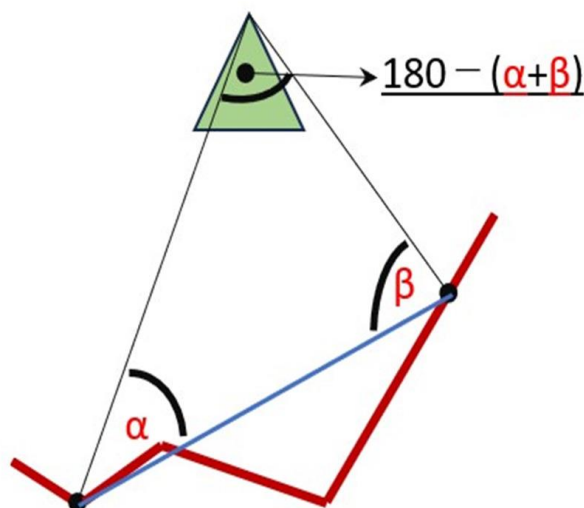


図3. 交会法

この交会法によって、測線上の二地点と富士山など高山の頂上とから構成される三角形の内角の和を合計すると、必ず180度になるという**三角形の原理**から、実測でできなかった残りの内角の角度も自ずから確定します。これにより三角形の内角の全ての角度が確定したその三角形を作図された地図上の折れ線に重ねてみることによつて誤差を検出し、測線の形状をその三角形に合致するように移動させて測線の誤差を補正しました。

### 【房総半島の地形的問題】

しかしながら、本稿の叙事詩で詠われている房総半島地域は、筆者の出身地でもあるので地形に関して筆者には土地勘があります。その筆者の土地勘によれば、この房総半島の南側と東側には太平洋が広がっており、方位測量の対象になるような高山や島嶼はありません。

また、安房・上総における太平洋沿岸付近は沿岸の近くまで低い山が迫っているため、広域な範囲の測線上の2か所以上の地点から共通して見通せる富士山等の高山を見通すことができません。

更に、九十九里沿岸地帯も、沿岸から二里ほどの内陸地点に両総台地が連なっているため、やはり方位測量の対象となるような遠方の高山の目視が不可能なのです。このように、遠方の高山への方位を測れない状況が房総半島の南端から銚子までの大よそ150キロメートルも続いているの

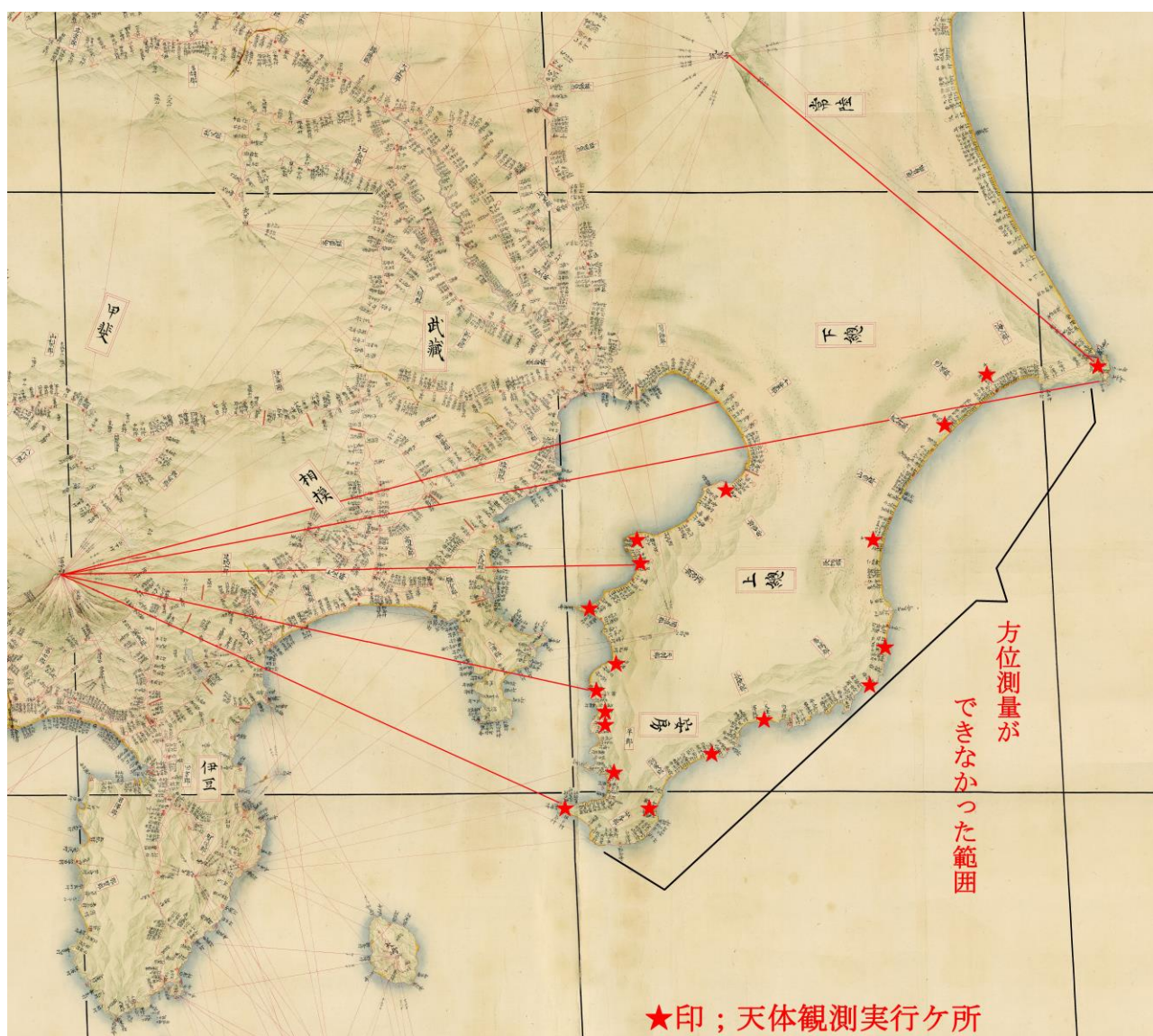


図4. 房総半島からの富士山と筑波山の方位測量

伊能中図（NISSHA 株式会社所蔵、イブ・ペイレ氏旧蔵）に加筆、画像は『伊能図大全』による

です（図4）。そのことは忠敬先生にとっても地元なので当然知っていたことから、「方位を測れず  
量地に伴う測線誤差の増幅を憂いつつ」という心境になり病氣にもなっていました。そのような状況が十日も続いていた上での鉾子でした。その鉾子は方位測量における地形的な問題の無い本州の最東端の地なので、誤差の補正を行うのに絶好の場所だったのです。そこで、遠方の高山への方位データを得ようと執拗に逗留を続けて方位測量に挑戦したのですが、湿気の多い時節でもあったので見通しが効かない日が八日も続き、九日目になってようやく富士山への方位が測れた、という次第だったのです。その朗報が隊員から入ったので持病も全快してしまっただけの悦びとなった、と忠敬先生は業務日誌に吐露してしまっただけでしょう。

鉾子の犬吠埼から富士山への方位は、「申一九二五」。この方位は360度方位に換算すると、  
申 二四〇度  
一九 一九度  
二五 二五五分  
即ち、二五九度二五分（西南西の方向）でした。

この結果、房総半島南部の洲崎と本州最東端の鉾子と富士山とからなる三角形の内角の全てが確定されたので、富士山を基点にしてその三角形を地図紙の上で描けば、洲崎から鉾子に至る測線を正しい状態



に補正することが可能となったのです（図5）。

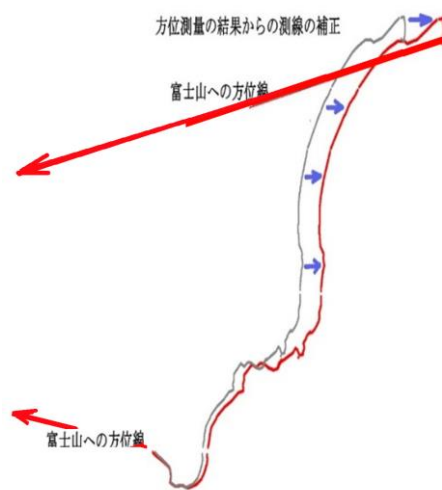


図5. 測線の補正

### 【記念碑に刻まれた悦びの理由】

ところで、忠敬先生のこの悦の肉声に感動したことを記念した記念碑（図6）が平成25年11月17日に除幕されました。

この記念碑には、次のような説明文が刻まれています。

「伊能忠敬測量隊は、享和元年（一八〇一）七月十八日から九日間銚子に滞在しました。銚子は太平洋に突き出た東端の地で富士山・筑波山・日光の山々を目視できます。特に、富士山の方位測定は、**測量の正確さを確かめるために重要でした**。忠敬は七月二十六日の測量日記に「晴天、此早朝日の出に犬若岬に於て（中略）富士山を測り得たり、其の悦知るへし（下略）」と記しています。忠敬は此の地で**測量の精度を確認し自信を深めました**」。



図6. 伊能忠敬銚子測量記念碑

筆者は、最近になってこの碑文に改めて接して感じたことがあります。

多分、この碑文をしたためた方も先刻お気づきであったとは思いますが、碑文では限られた字数のため触れられなかったであろうことを以下に補足します。

富士山への方位測定が実行できた直後のこの時点では、未だ日毎の測量結果を基にした下図ができていない程度であって、広域の地図は出来ていないことから、測量の精度の確認はできません。

また、富士など高山や島嶼への方位測量は、**測量の正確さを確かめるために実施する**のではなく、図3及び図5に示した方法で誤差を補正して**正確さを確保する**目的で実

施する測量です。

しかしながら、房総半島南部から銚子に至る途中で方位測量が一切実行できなかったので誤差補正が出来ないかも知れないという深刻な問題に忠敬先生は悩んでいた筈です。そのような伏線があったところへの朗報だったのです。これによって**測量の精度を確保できると確信**できたことから病氣も回復してしまう程の悦びとなったのだ、ということであつたのでしよう。

### 参考文献

- ・測量日記(第四巻) 伊能忠敬記念館蔵
- ・前田幸子『量地伝習録』を読む②「伊能忠敬研究89号」
- ・宮内敏「伊能忠敬銚子測量記念碑建立詳報」伊能忠敬研究72号

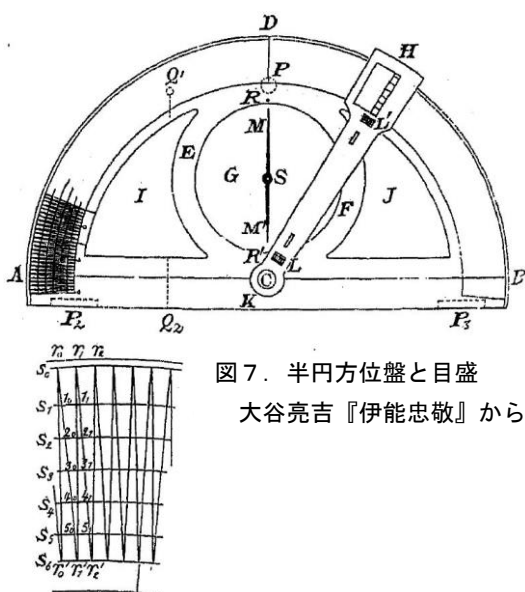


図7. 半円方位盤と目盛  
大谷亮吉『伊能忠敬』から



# 伊能図と地図投影法

菱山 剛秀

## はじめに

伊能図の中図と小図には、経緯線が描かれているため、現代の地図投影法に基づいて描かれているように見える。しかし、すでに多くの研究者が指摘しているように、伊能図は、本体の地図と経緯線の地図投影法が一致しておらず、厳密には現代の地図投影法の理論で作製されているとは言い難い。そこで、本稿では伊能図の図法の性質と現代の地図投影法との関係を整理してみる。

## 地図投影の概念

地球表面（曲面）を正確に平面に描くことはできない。そこで、さまざまな地図投影法が考案されてきた。一つは、球面から平面へ変換する際、直接平面に投影するのではなく、一旦立体である円錐や円筒に投影し、これを平面に展開する方法である。円錐に投影する方法を円錐図法、円筒に投影する方法を円筒図法という。円錐図法は緯線が極を中心とする円弧になり（図1）、円筒図法は、緯線が赤道に平行な直線になる（図2）。

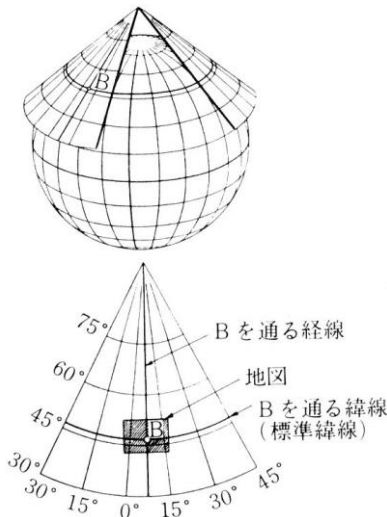


図1 円錐図法

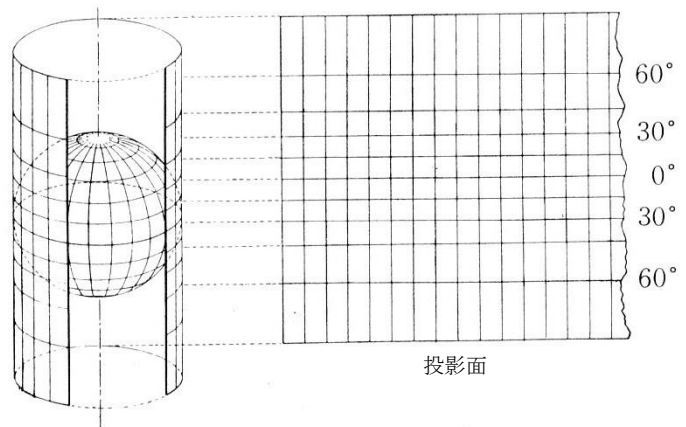


図2 円筒図法

地図投影法は、「投影」という用語からレンズを通した光学的な方法の印象を受けるかもしれない。地図投影法の原理を大別すると、光学的な考えに基づく方法と地図に求める条件を満たすように計算で座標を求める幾何学的方法がある。前者を投射図法1)といい、後者を非投射図法という。投射図法は、視点の位置によって心射図法、内射図法、平射図法、外射図法、正射図法に分類される（図3）。地球の中心に視点を置く心射図法は、地図上の任意の2点を結ぶ直線が大円2)となり、球面上の最短距離を表す。ただし、距離を測定することはできない。心射図法は投影面が平面だけでなく、円錐や円筒にも適用される。平射図法は、視点が投影面接点の対蹠点3)になり、角度が正しく表現される。この図法は16世紀か

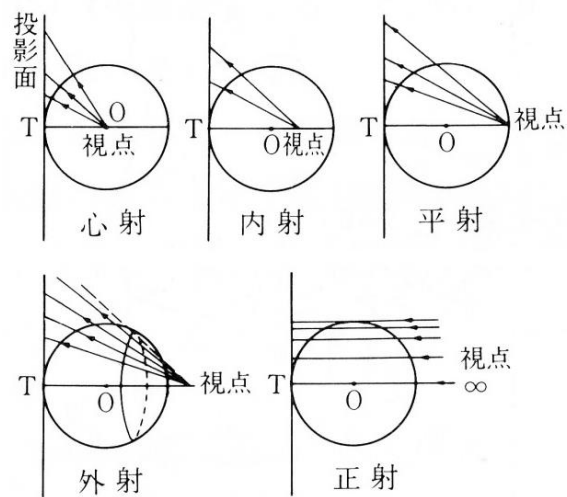


図3 投射図法

球面を平面に変換しようとすると、角度、面積、距離のいずれかの要素に歪が生じることになる。そこで、作成する地図の目的に合わせてこれらの歪のいずれかを犠牲にし、必要な条件を保持するさまざまな方法が考案された。地図投影法を条件別に分類すると、角度を正確に表現する正角図法、面積に面積は正積図法、距離は正距図法に分類でき、正角と正角、正距と正積の条件は両立できるが、正角と正積の条件は理論的に両立できない。地図投影法を特定する場合、投影面の分類と条件による分類を組み合わせて示すことができ、円筒図法を例にとれば、正角円筒図法、正積円筒図法、正距円筒図法のように表現できる。しかし、地図投影法は、同じ条件でも異なる考え方の表現があり、一般的には、地図投影法の考案者の名前を冠して呼ばれることが多い。

18世紀にかけて多く利用され、高橋景保が作成した「新訂万国全図」もこの図法によっている。

たとえば、正積円筒図法に分類されるサンソン図法(4)は、面積を正しく表すため、経線間隔を緯線長に5)等しくしたものである。そのため、経線は正弦曲線として描かれる(図4)。一方、ランベルト正積円筒図法は、緯線間隔で面積を等しくなるようにしたため、高緯度になるにつれて緯線間隔が狭くなっている(図5)。

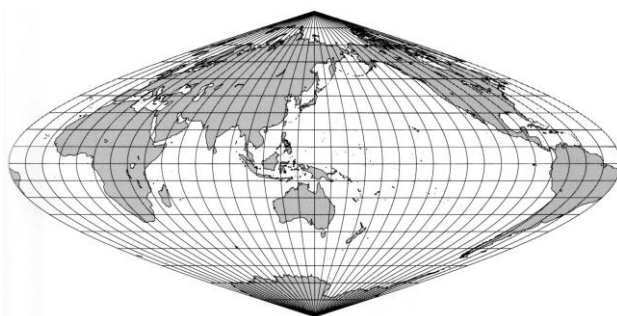


図4 サンソン図法

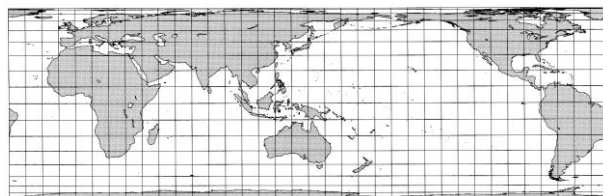


図5 ランベルト正積円筒図法

経線と緯線が直交する円筒図法には、ランベルト正積円筒図法のほか、メルカトル図法(6)や正距円筒図法などがある。メルカトル図法は、角度を正しく表す「正角円筒図法」である。角度を正しく表すため、緯線間隔を経線間隔の伸びに合わせ引き延ばし、東西と南北の比を等しくすることで、地表と地図が相似形になるようにしたものである。したがって緯線間隔は高緯度になるほど長くなる(図6)。

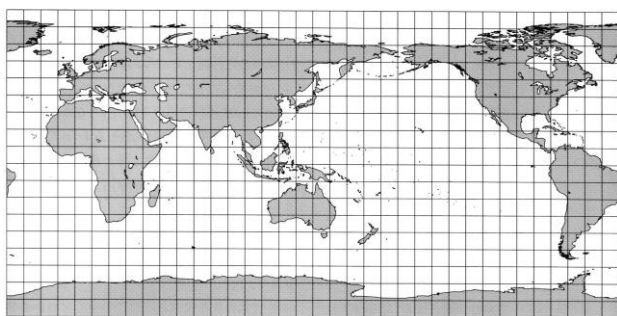


図7 正距円筒図法

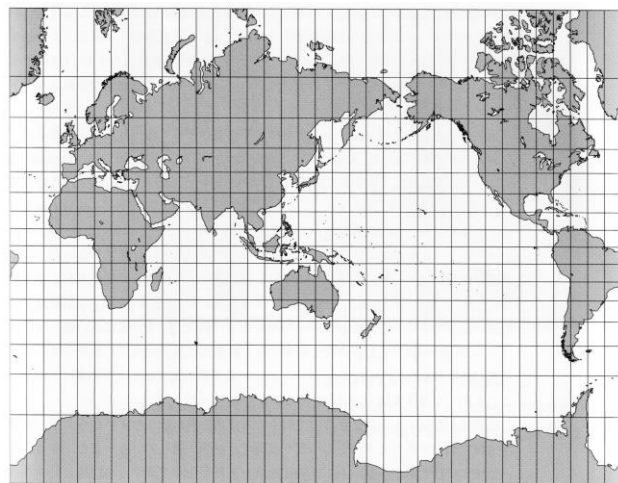


図6 メルカトル図法

### 伊能図の経緯線

正距円筒図法は、すべての経緯線を度単位の等間隔で表すので、経緯線は正方形になる。そのため、緯線間隔(経線長)は正しいが、高緯度になるほど緯線長が引き延ばされ、角度や面積の歪が増大する(図7)。

伊能図は、現代の地図投影法の理論に基づいて作成されているとは言い難いが、地図に描かれている経緯線の特徴は、大谷が指摘しているようにサンソン図法と一致する。すなわち、経線は中央子午線を基準に、緯線長を結んだ曲線として描かれ、緯線は等間隔の平行線として描かれていると考えられる。ただし、実際は描かれたすべての緯線上で緯線長を計測しているとは見えず、数度離れた緯線間を直線で結んだ台形図法(7)を南北につないだように見える(図8)。

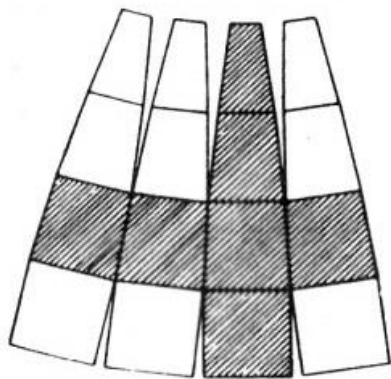


図8 台形図法の南北の接続  
広域では、東西の接続間に隙間が生ずる。

図9と図10に示したサンソン図法と台形図法は、いずれも経緯線間隔が5度である。伊能中図の範囲は、この一つの経緯線枠(四辺形)に近く、その中では、経線を曲線として描くことが難しいかもしれない。たとえば、緯線長の長い北緯



30度から36度の範囲で差が最大になる北緯33度における中図の緯線長1度の図上距離の差は、0.6mm(2厘)弱であり、1度ごとの緯線上で描き分けることは難しいと思われる。

伊能図に描かれた経緯線が、サンソン図法と一致するのは、忠敬等がこの図法を認識していたのではなく、球面上の経緯線の特徴から、緯線長を地球上の実距離として描こうとした結果、自然に導き出されたものと考えた方がよいであろう。

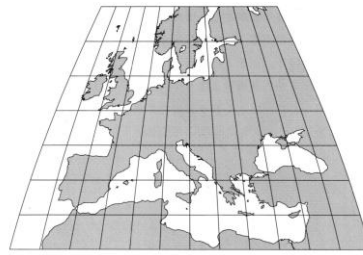


図9 サンソン図法

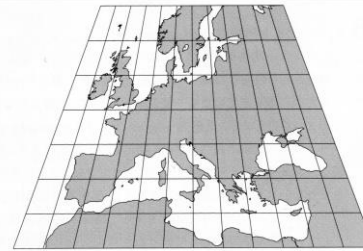


図10 台形図法

### 伊能図本体の図法

伊能図は中図8枚、小図3枚で全国が描かれている。地図の範囲が狭域なら球面の一部を平面とみなしてもよいだろうが、中図や小図1枚の範囲は広域である。前述したように、球面を平面に変換する場合、角度、面積、距離のいずれかを犠牲にしないと平面の地図として描くことはできないはずである。では、伊能図の本体はどのような性質の地図なのだろうか。

伊能図の作成記録を見ても、伊能図は、測量結果を平面上の距離による直交座標に基づいて描いており、球面を平面に描くための座標変換は行っていない。直交座標で地図を描く方法には、古代

の中国で確立し、日本でも使用された方格法<sup>8)</sup>がある。方格法は、地表を平面とみなし、東西・南北の直交する等距離方眼を基準に地図を描く方法である。伊能図に方格法の方眼は描かれていないが、東西・南北成分の距離を計算して基準にしていることから、地図を描く方法は方格法と同じと考えられる。

方格法では、南北成分の方向は、経線の方向に一致し、東西成分の方向は緯線の方向に一致する。これは、東西方向の距離が緯線長(経度間の実距離)と一致しないことを暗示している。

国土地理院に残る伊能中図(図11)には、経緯線とは別の方眼が引かれている。この方眼のうち赤枠で示した4×6の大きな方眼は、明治期に整備された20万分1の地図の範囲と一致する。20万分1地図は、南北40分東西1度の経緯度図郭による台形図法で整備されている。しかし、伊能図に描かれた方眼は、台形ではなく長方形である。ここに、伊能図本体の図法を確認する手掛かりがある。本来実測した値で描かれた緯線長(東西距離)は、緯度によって変わるはずなのに、この方眼は、上辺と下辺が等距離で描かれており、緯度が変わっても緯線長は変わっていないことを示している<sup>9)</sup>。たとえば、10分単位の方眼で台形と長方形の南北の緯線長の差は、北緯35度と北緯35度10分で0.8mmほどであり、等脚台形の片側の差は0.4mmほどである(図12)。この差を図全体に配分して調整することは事実上困難である。そのため、結果として、伊能図は図面単位で基準地点から高緯度に離れるにしたがい、東西が実測値より伸びて描かれたと考えられる。忠敬等はこうした地図本体の性質に気付いていなかったか、あるいは、気付いていたとしても調整が困難なため、誤差の範囲として処理したのではないだろうか。



図11 国土地理院所蔵の伊能中図に描かれた方眼

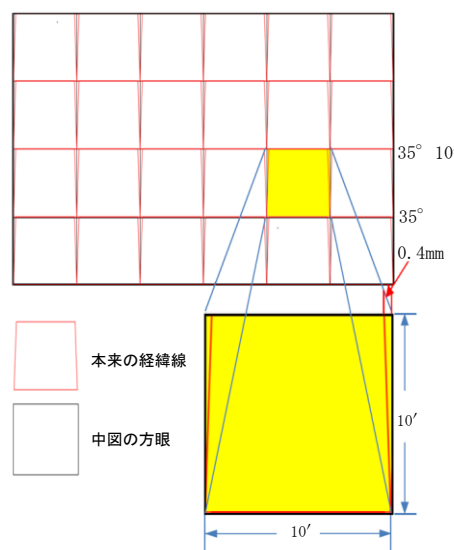


図12 10分単位の方眼の接合

### 電子地図の利用と地図投影法

近年、電子化された地図の利用が広まり、GIS(地理情報システム)の機能を備えたサイトも登場している。特に、国土地理院が公開している「地理院地図」やGoogle社が公開している「Google Earth」は、比較的手軽にこうした機能が使用できるサイトである。これらのサイトの地図は、直接またはGISアプリを使用して既存の地図を重ね合わせることも可能である。ただし、既存の地図画像と重ねる場合は、地図投影法を考慮する必要がある。



「地理院地図」や「Google Map」など多くのウェブ地図は、メルカトル図法が採用されている。これらの地図は、GISの背景に設定することもでき、GISの機能を利用して、様々な地図データと重ね合わせることもできる。

Google Earthは、地球儀のような表現で、地図の拡大縮小ができるので、拡大すると宇宙から地球上に降り立つような見方ができる。この地図投影法は、地球上の一点で接する平面に地球外の視点から投影する外射図法（図13）になると考えられる。外射図法は視点の位置によって図形も変化する、図の中央部の歪みは小さいが、周辺に離れるにしたがい歪みは大きくなる。



図13 外射図法の例  
上空 35,800km からみた半球図

Google Earthには、既存の地図画像を読み込み、サイズや向きを変更しながらGoogle Earthの衛星画像と重ね合わせる機能があり、伊能図と重ねることも可能である。ただし、Google Earthに地図画像を重ねる場合、読み込んだ画像サイズや向きは変更できても、画像の部分を変更することはできないので、重ねる画像の地図投影法に注意が必要である。一例として地理院地図の画像をGoogle Earthに重ねてみると、基準とした緯度帯から高緯度になるにつれて南北方向のずれが目立

つようになる（図14）。前述したようにメルカトル図法の地図の緯線間隔が一定ではなく、高緯度になるにつれて長くなるからである。

GISで地理院地図やGoogle Mapの地図に地図画像を重ねる場合も同様の注意が必要である。



図14 Google Earthにメルカトル図法の地理院地図の画像を重ね  
北緯 30° と 45° の緯線、東経 130° と 145° の経線で重ねると、  
緯度の中央部、佐渡島（北緯 37.5°）付近のずれが大きくなる。

#### 注

- 1) 平面への投射図法は「方位図法」とも呼ばれ、地図の中心から全方位の角度が正しく表される。
- 2) 地球の中心を通る面の切り口が構成する円。子午線が大円に当たり、赤道以外の緯線が小円に当たる。注4)参照。
- 3) 経緯度の対称地点で、地球の裏側に当たる。
- 4) ニコラス・サンソンが1650年以降出版し

#### 文献

- ① 日本国際地図学会編（1998）『地図学用語辞典「増補改訂版」』技法堂出版
- ② 政春尋志著（2011）『地図投影法—地理空間情報技法』朝倉書店
- ③ 菱山剛秀（2017）『伊能図の使われ方』伊能忠敬研究81号 4—9
- ※ 本稿に掲載した図1〜3及び図8は文献①、図4〜6、図9、図10及び図13は文献②、図11及び図12は文献③から引用した。

- た地図帳に多く用いた。また、天文学者ジョン・フラムスチードが星図に採用したため、サンソン・フラムスチード図法とも呼ばれる。
- 5) 緯線長は緯度を $\phi$ とした場合、子午線長に対し、 $\cos$ の割合で短くなる。
- 6) デラドウス・メルカトルが1569年に出版した世界地図帳に初めて用い、広まった。
- 7) 図郭の上辺と下辺を緯線長、中央経線（と右脚台形の高さ）を経線長とする地図投影法で、正角、正積、正距のいずれの条件も満たさないが、図単位での歪みが小さいことから、陸地測量部が作成した多くの地図に採用された。
- 8) 後漢時代の長衡（78—139年）が提唱したとされ、その後中国では「計里画法」として清代まで使用された。方格法の方眼は平面上の距離単位であり、正距方位図法の経緯度単位の方眼とは考え方が根本的に異なることに注意。
- 9) この方眼が直交する経緯線と一致していることから、伊能図本体の地図投影法は、意図的ではないが、結果として原点を標準緯線とする「正距割円筒図法」に相当すると考えられる。
- ※ 説明を単純化するため、本稿における地図の投影面は地軸に対して平行とし、地表面と投影面の接点（標準緯線）は、赤道に統一している。

自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海  
第二十二（自酒田／至本莊）

玉造功

縮尺 .. 3600分の1

寸法 .. 84.5 x 174.3 cm

範圍 .. 秋田県由利本荘市、山形県酒田市

一次から四次にわたる本州東部の測量結果をまとめ、文化元（1804）年に日本東半部沿海地図として大図69枚、中図3枚、小図1枚を上呈した。これらは將軍徳川家斉が上覧したことで知られるが、その後の行方は不明である。

日本東半部沿海地図の伊能家の副本は国宝に指定され、この大図もその1枚である。なお、この文化元年上呈大図は文政4年の最終上呈大図とは図割が異なる。

享和二（1802）年六月十一日から十月二十三日まで行われた第3次測量のうち、九月九日から十三日の測量の成果がこの大図である。「測量日記」の冒頭に記された高橋至時からの指示では、「陸奥三馬屋より西之方北海道、出羽・越後・越中・能登・加賀・越前までの海辺、夫れより陸地通南之方尾張へ出、尾張・三河・遠江・駿河の間海辺」を測量する様にというものであった。但し実際には第3次と第4次の2度の測量に分けて実施した。

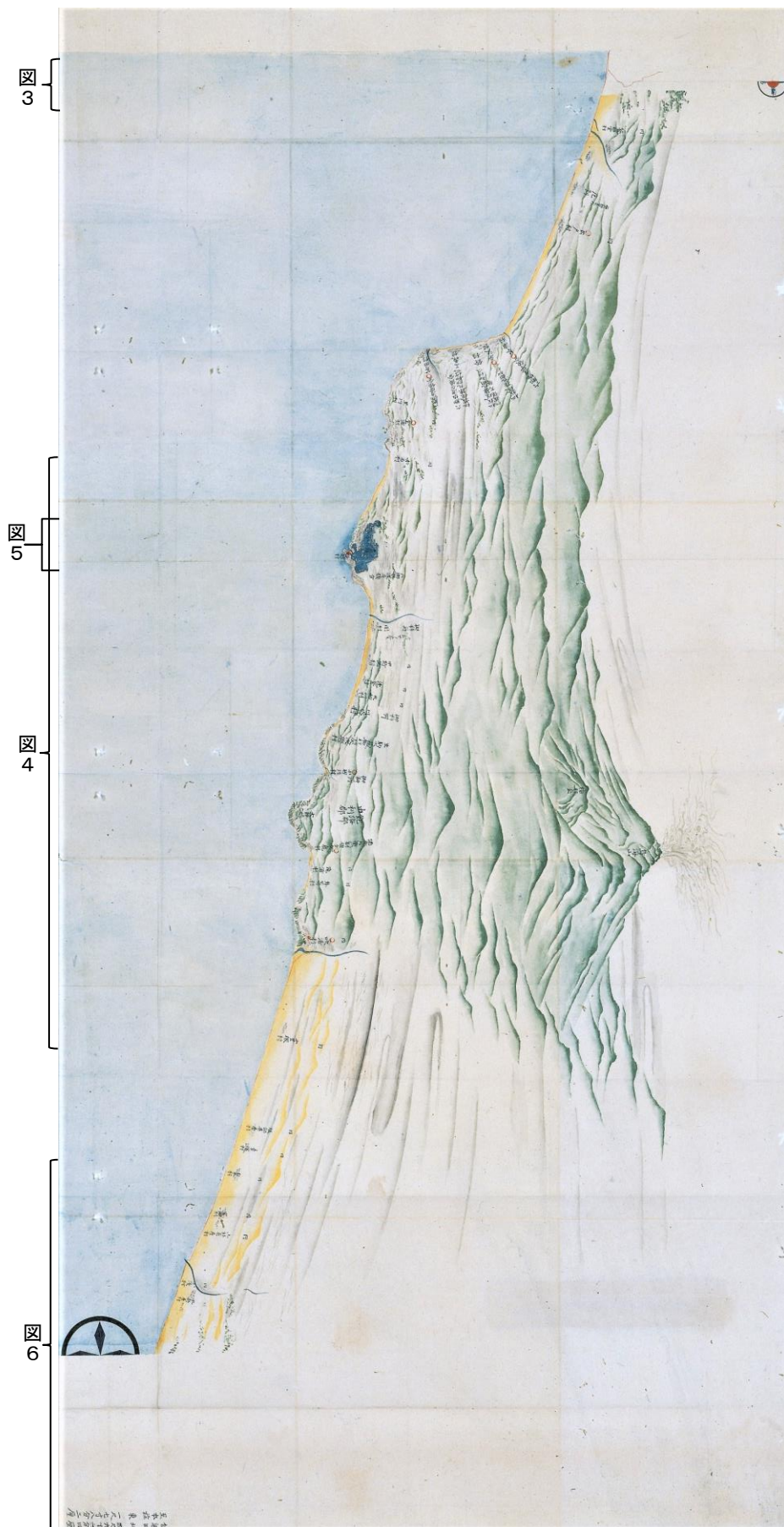


図1「江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 二十二〈自酒田／至本荘〉」  
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止 図3～6も同様



この大図の北側(図3)に白地に朱線だけが引かれている部分がある。これは享和二年九月九日の測量範囲のなかで、本荘城下から子吉川添いに日本海岸に出て薬師寺堂村の手前までの範囲が北側に接続する別の大図となった。その部分を彩色せずに本荘城下からの測線だけを描いている。



図3 図1の北側を拡大

大谷亮吉は『伊能忠敬』87頁で「北海道」とルビを振っている。「北海道」の命名者は松浦武四郎であって伊能忠敬ではない。

陸奥三馬屋と云ふ北海通か羽

至時の指示文で注意したいのは、「北海道」である。「測量日記」の翻刻は千葉縣史料、佐久間達夫氏の翻刻、イノペディア版があり、いずれも「北海道」としているが、図2の「測量日記」の原文を見ると「北海通」が正しい。

図2

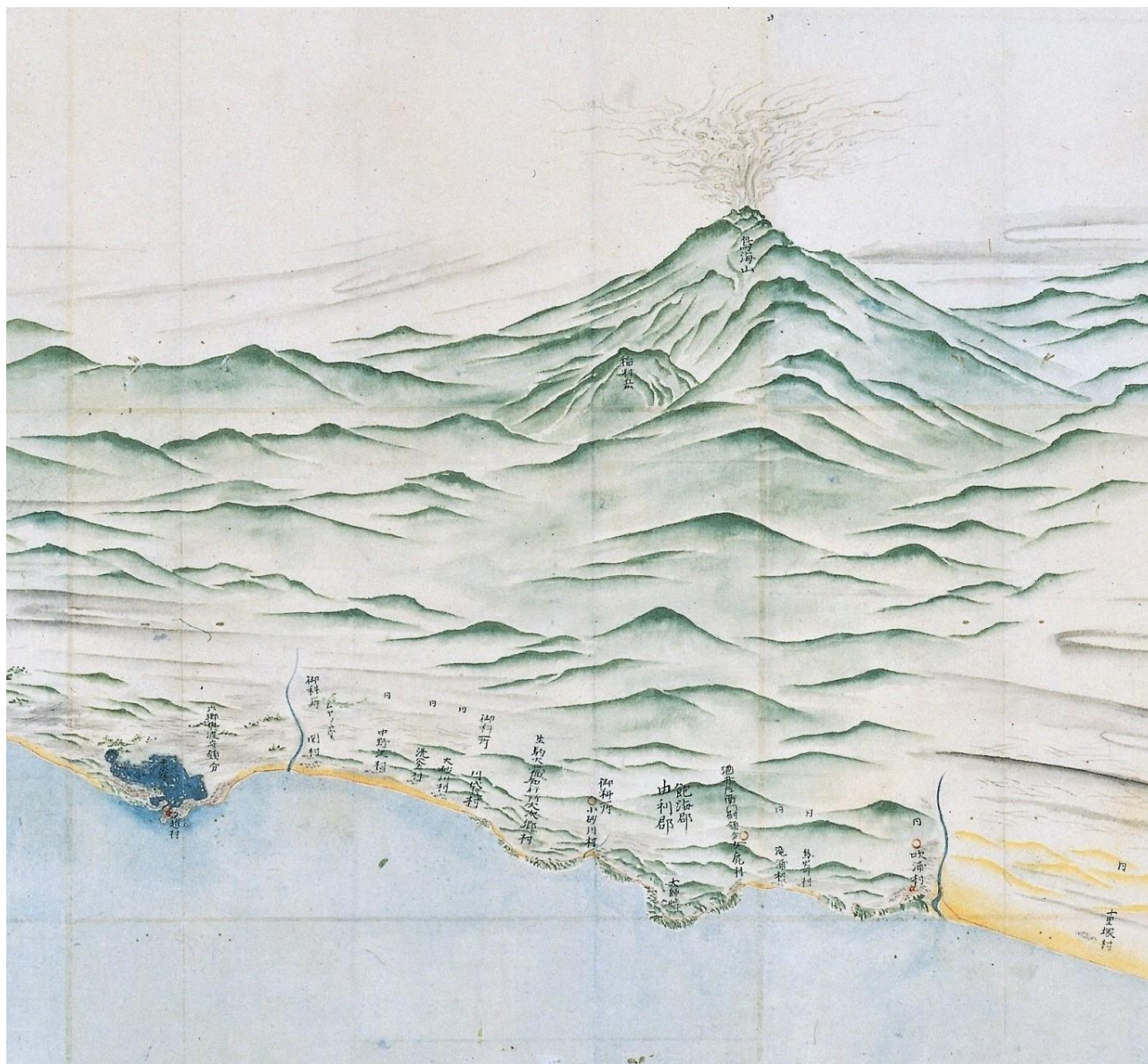


図4 図1から鳥海山と象潟の部分拡大(東を上になっている)



図4はこの大図でもっとも有名な部分である。噴煙を上げる鳥海山と景勝地象潟は伊能図の特色である絵画的表現の最たるものであろう。鳥海山が山体崩壊したことによって、岩屑なだれが日本海の海岸まで到達し、多数の小島が生じ、次第に砂嘴によって日本海から切り離されて潟湖となり象潟が成立した。但し忠敬の測量の二年後の文化元（一八〇四）年の象潟大地震によって約2m隆起したため、「九十九島八十八潟」と呼ばれた象潟は現在のような陸地となった。



図5 図1から象潟の部分拡大

九月十日の「測量日記」に「船に乗、象潟諸島を測る」とあり、図5には象潟の水上に測線が引かれており、船による引縄測量を示している。

図4では吹浦村を境として景観が一変したことがわかる。これまで日本海岸を南下してきたが、九月十二日の「測量日記」では「道曲々、行路丸石岩石おほく、道狭く、上下度々ありて、甚行路難し」で馬や駕籠に乗ることもできないと記す。長持などの荷物は船で送ることになった。

翌日には風景が一変する。測量先で書き留めた「忠敬先生日記」と後で清書した「測量日記」では

表現が微妙に変化する。九月十三日の「忠敬先生日記」では「海岸白砂、右ハ海、左二三十丁も少高砂原」と庄内砂丘が始まった印象を記す。同日の「測量日記」では「村々海岸小高所に住す」と海岸砂丘地帯の集落の立地条件に注目している。

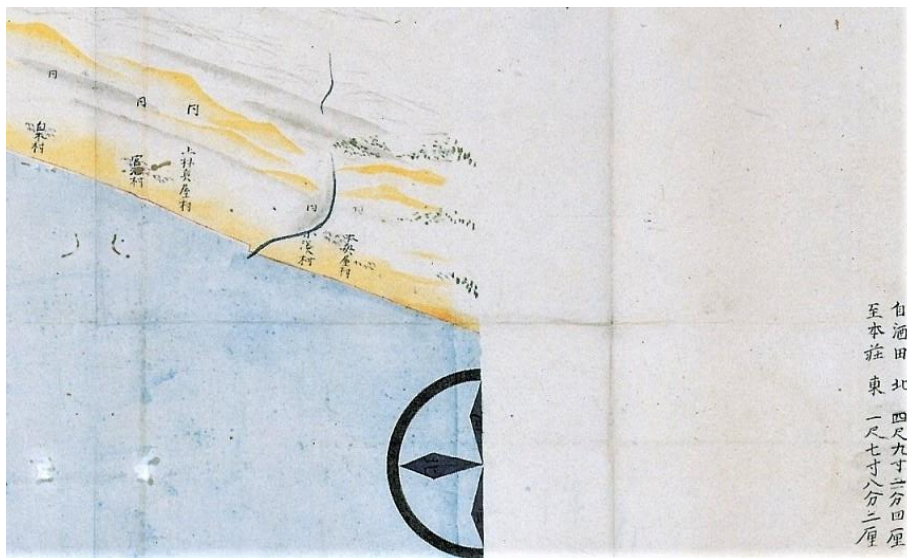


図6 図1から南側の部分を拡大（東を上にして）

図6には酒田と本荘の南北方向と東西方向の図上の寸法が記されている。日本東半部沿海地図の69枚の大図にはこのように図上の寸法が記されている。忠敬はその理由を日本東半部沿海地図の小図に記載された「沿海地図凡例」（図7）に次のように記しているので、読みやすくなったものを紹介する。

地図仕立の儀、如何様に精しく仕り候ても、紙にて仕立候へば、彩色等にて少々縮み候こともこれ有り。また年を経候えば伸び候こともこれ有り候。よつて後の御見合のために、東西南北の寸尺くわしく相認め置き申し候。

伊能図の用紙は伸縮する可能性があるもので、東西南北の寸法を詳しく記載したというのである。

ところが、酒田より本荘に至る南北・東西の寸法が記載されているものの、肝心の本荘も酒田も共にこの大図には描かれていない。本荘の場合は欄外の朱の測線の末端ということで特定できるが、酒田の場合は図6の本興屋村の南側でこの大図に隣接する位置であるものの、測線も描かれていないので、この大図上では場所を特定できない。これでは酒田と本荘の南北方向と東西方向の寸法とを詳しく記されていても、用紙が伸縮したのかどうかはわからない。

なお、図上の寸法の基点となった地点には昼間通過しただけで宿泊していない場所もあり、「享和二年戊戌 北極高度測量記」と突き合わせても、緯度を測定した地点を選んだともいえない。

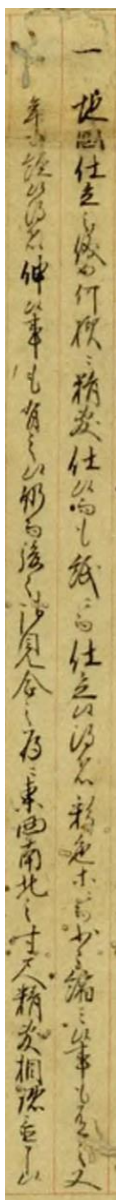


図7

「沿海地図凡例」を記載した「伊能日本実測小図一」は国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる

## 会員だより

### 忠敬旧宅五句

東京都 伊能 洋

敗戦日忠敬書斎灯せしよ

千坪の旧宅囲む蟬時雨

忠敬も汗拭ひしか撥釣瓶

蚕豆の畠はむかし司天台

日盛りやづしりと重かり蔵の錠



文庫蔵の引戸

伊能洋様の投稿のお手紙の中の一節をご紹介します。

私は小三から小五までの三年間を、東京からの疎開児の一人として、忠敬旧宅の祖母の元で過ごしました。旧宅では、毎日のように訪れる「地図見」の応対をする祖母孝の手伝いで、文庫蔵と書斎の間を走り廻っていました。今、国宝の「量程車」に乗って遊んだことなど、信じられないことです。

### 佐原の伊能家天文台

千葉県 玉造 功

司天台は天文台の唐名で、浅草の天文方の天文台は司天台とも呼ばれた。伊能忠敬の嫡孫忠誨は佐原の伊能家の屋敷内に天文台を設けていたので紹介する。

文政五（1822年）十一月七日、数え年十七才の伊能忠誨は八丁堀亀島の地図御用所を引き払い、佐原に帰村して「在所御用」を勤めることになった。忠誨は測量機器を船で佐原に送り、現在の伊能忠敬旧宅に子午線儀や象限儀などを据付け、在所御用としての天体観測を始めた。

忠誨の日記には天体観測の様子も記録されている。文政五年十二月の月食観測について、「十五日四半時（23時）頃ヨリ黒雲出通行。其折々測食。今夜手伝人。望遠鏡、大川治兵衛・茂兵衛。垂瑤球、又蔵・忠吉。象限儀、伊能七左衛門・平右衛門。観星鏡線付、久保木源蔵。地平圭儀、永沢治郎右衛門・久兵衛」と記している。江戸の天文方の役人や忠敬の内弟子たちの役割を佐原村の人々が果たしたのである。

忠誨の日記には文政七年十一月二十八日に領主の旗本津田家の佐原村担当の家臣が「天文台測量見物いた

し帰ル」と記している。

文政七年二月に忠誨は伊能家の屋敷を測量し、測量データである「居屋敷実測野帳」（文書・記録類216）と「伊能家屋敷地実測図」（地図・絵図類533）を残しており、天文台の位置も知ることができる。次の図は『史蹟伊能忠敬旧宅（書院・店舗・土蔵）災害復旧修理工事報告書』（2015年、香取市教育委員会）所収の図で、「伊能家屋敷地実測図」に「居屋敷実測野帳」などから建物の名称を書き加えたものである。赤い線で囲った店・表門・土蔵（文庫蔵）は現存し国の史蹟に指定されている。報告書ではその土蔵近くの正方形が天文台で、簡易的な建物ではないかとする。



伊能家屋敷地実測図に建物名などを加筆







# 「第57回地図展2024金沢」 「金沢の発展にワクワク・ドキドキ」

室山 孝・河崎倫代

金沢で27年ぶりに、地図展推進協議会・国土地理院北陸地方測量部主催の「地図展」が開かれた。テーマは「地図と空中写真で識る金沢の歴史」。会場はJR金沢駅東もてなしドームの地下広場であった。初日9月28日（土）午前10時、開会式があり、後援団体の一つである伊能忠敬研究会からは、代表理事の堀野正勝氏が参列した。



地下広場は親子連れも気軽におとずれ、にぎわっていた。

私たちは地元会員として、初日に開会式と展示を見、午後の講演会にも参加したので、その内容等について報告したい。

会場に入るとすぐ、今年4月に国土地理院によって撮影された大きな金沢市最新空中写真（縮尺3000分の1）が床展示されており、しゃがみ込んで自分の住む町を確認する家族連れの姿が見られた。他に「ガリバリ体験・余色立体図」が床展示されていた。本州中部の大きなカラー写真を特殊眼鏡で立体的に確認でき、多くの方が楽しんでいました。



金沢市最新空中写真

壁面展示では、「金沢市の変遷」が明治から令和までの地形図と空中写真により示されていた。およそ150年間の金沢とその周辺地域の変貌を、想像を膨らませながら地図で追って見ることができた。また「主題図からみる金沢」では、河川と扇状地形、用水路の変化、金沢城下、鉄道・道路などのテーマ別に、地図や鳥瞰図・案内図・時刻表等が複製展示されていた。中でも鉄道は明治以降の金沢の

発展を物語るテーマであり、今年3月の北陸新幹線敦賀延伸もあって、タイムリーな企画だった。

金沢には藩政期の城下絵図が多く残っていて、その比較ができたのも今回の成果であろう。また、伊能忠敬との出会いエピソードのある越中の測量家石黒信由の作成になる加賀・越中・能登三カ国絵図の精密さ、辰巳用水絵巻の迫力ある描写などにも目を奪われた。



金沢城下に張り巡らされた数々の用水、城下防備のかなめ「惣構」の詳細な解説など、初めての知見も多かった。

特別展示として、保存状態の良さで知られる（株）ゼンリン所蔵「伊能小図」が壁面展示されていた。複製なので間近に見られ、全国の地名がすべて読み取れる貴重な機会を与えてもらった。

「金沢市時層地図」は55インチの大型ディスプレイの面をタッチすると、見たい場所や時代の地図や空中写真が映し出されるといふ最新の器械を利用した展示。また、今年元日の「能登半島地震における国土地理院の被害対応」では、電子基準点による



（株）ゼンリン所蔵「伊能小図」が壁面展示された。  
会誌95号の表紙・解説、「研究と話題」に詳しい記述がある。



第57回地域講座 2024金沢 基調講演

# 古地図で楽しむ金沢

## —加阿彌の城下町プロジェクト—



● 2024年9月20日（土）  
● 金沢市美りてなし・ドーム地下空間  
● 金沢環境大学 本郷 史史

午後の講演会は、まず金沢星稷大学教授本康宏史氏が、基調講演「古地図で楽しむ金沢―加賀藩の城下図プロジェクト」と題してお話された。その内容は、

ワンカ羅針、バーニア目盛りの象限儀等を使用し、測量データの誤差を少なくするダブルチェック、坂道の多い金沢城下町の測量に三角関数を駆使するなど、精密さを追い求めた。

文政5年（1822）から9年を費やして、金沢城下分間絵図（御次御用金沢十九枚御絵図）（石川県立図書館所蔵）を完成させた。

次の特別講演は、「地図大使」で気

象予報士でもある石原良純氏が、「地図とジョギング」頭の中には地図がある」と題して話された。氏は石川県や金沢を度々訪れており、金沢マラソン出場などの体験から得た金沢の町の特色を軸に、豊富な話題を披露されていた。メディアに引っぱりだこの氏の軽妙なトークに、会場は笑いに包まれた。

今回の地図展は10月6日（日）までの9日間催され、「キッズデー」として29日（日）には小学生を対象に地球儀づくりの体験会があり、また

展示した今回の「地図展」は、改めて金沢の魅力を発見する良い機会になった。準備・担当された皆さまに感謝申し上げます。

第57回 地図展 2024 金沢 ポスター



## 吉岡伊能像視察研修

「はこだて検定合格者の会」

中塚 徹朗

北海道福島町吉岡漁港入口に立つ伊能忠敬翁銅像は、杖先羅針（彎窠羅鍼）での測量姿を再現した日本で唯一の伊能像である。さる十月五日、函館の歴史・文化・観光の知識を学ぶ「はこだて検定合格者の会」（山本和雄会長・二十八人）は、吉岡を訪れ会

員向け研修会を開いた。まず、吉岡総合センターに展示してある彎窠羅鍼や資料を見たあと、銅像のある「北海道伊能忠敬測量開始記念公園」に移動した。伊能隊の上陸の歴史的背景や函館の位置づけ、また銅像の特徴について、当町鈴木志穂学芸員と私から説明させていただいた。

## 吉岡から函館までの測量について

寛政十二（1800）年、蝦夷地測量

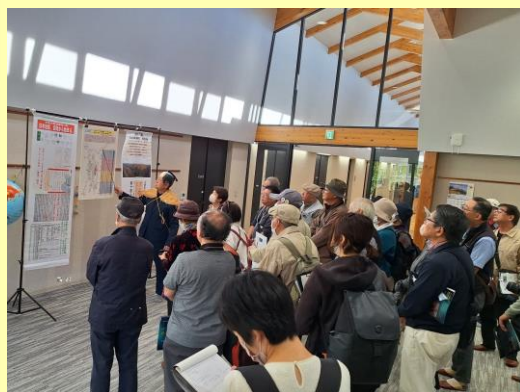
福島町の歴史めぐる  
「はこだて検定合格者の会」がツアー

中塚会長（右）から伊能忠敬の蝦夷地測量の解説を聞く参加者

【福島】「はこだて検定合格者の会」（山本和雄会長）は5日、会員向け企画の貸し切りバスツアーで福島町を訪れた。28人が参加。町教委の鈴木志穂学芸員や福島町町史研究会の中塚徹朗会長が案内役を務め、日本地図を作製したことで知られる伊能忠敬や松前藩時代からの旧道「殿様街道」などに関心を深めた。

一行は町吉岡支所を訪ね、伊能が1800年に第一次測量として蝦夷地を訪れた際、津軽・三厩から舟で箱館を目指すも強風で進めず、上陸地が吉岡となった。その後、陸路で箱館に向かったことが記録として残っている。

寛政十二（1800）年、蝦夷地測量へ向かう伊能測量隊一行六人は、奥州街道を北上、三厩まで測量し船で箱館へ向かうも風の影響で五月十九日（旧暦）福島町吉岡の沖に着く。小舟に乗り換え吉岡川川岸から



吉岡総合センターで伊能翁の蝦夷地測量の説明を真剣に聞く「はこだて検定合格者の会」の皆さん

上陸（長男景敬への忠敬書状）した。ちょうど総合センターの窓から吉岡川が見える。「このあたりに忠敬さんは上陸したのでは」と私が説明すると、研修の皆さんは食い入るように川を見つめていた。

その翌日吉岡から蝦夷地測量が始まる。「陸地一里余福島」（「忠敬先生日記」）、二日目が木古内町で蝦夷地

そばを作付けしていた記録がある。伊能も食べたのではないかと話した。伊能像がある北海道測量開始記念公園では鈴木学芸員が「像は函館の方向を向いている。東風が強かったことも表現されている」とし、中塚会長は「方位磁針

（今井正）

初めての天体観測「夜少測量」（「忠敬先生日記」）、三日目に函館入りとなる。記念すべき蝦夷地最初の昼の方位歩測量は福島町吉岡で行われ、夜の中象限儀による天体測量は木古内町が最初の地であることを説明させていただいた。研修のみなさんの真剣な眼差しに圧倒され説明する私自身も手に汗を握っていた。

## 吉岡伊能翁銅像の特徴

総合センターから車で一分、伊能忠敬翁銅像の公園に移動する。銅像は高さ2m、台座は高さ2.5m。作家は深川富岡八幡宮にある歩き出す伊能像を手がけた横浜在住の酒井道久先生。（北海道での）測量を始めるにあたっての伊能のやる気や決意が伝わる姿勢、表情にしたい」（北海道新聞）との思いが表現された。十次17年間に及ぶ日本全国測量の嚆矢である第一次蝦夷地測量の記念すべき測量スタートを彷彿とさせる姿だ。日記にある上陸時の強い東風が靡く着物や髷に表現されているという鈴木学芸員の解説に研修会のみなさんは、ノートを取りながら真剣に銅像を見上げていた。説明が終わると記念撮影。南からの日差しがまぶしい。雲一つない青空のもと厳しい測量作業中の忠敬翁の横顔が一瞬笑顔になったように私には見えた。



## 新入会員自己紹介

宮城県石巻市 門脇利勝

入会のきっかけは、仙台二華高校の総合学習の取り組みをお手伝いする中で伊能忠敬を知る必要が出てきたからでした。また、当地の海岸の史跡を見学に来る団体に伊能測量の説明をしたいと思います、研究会に入会させていただきました。

これからいろいろ勉強していきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

## お知らせ

### 伊能忠敬銅像清掃デーが再開！

数矢小学校の児童による富岡八幡宮の伊能忠敬の銅像清掃はコロナ禍で中断されていたが、2025年1月26日（日）正午から「第8回数矢小の子どもたちによる伊能忠敬銅像清掃デー」として開催されることになった。場所は富岡八幡宮結婚式場と伊能忠敬銅像前。主催は伊能忠敬研究会、後援は数矢小学校と富岡八幡宮、協力は数矢小学校PTAと千葉県ウォーキング協会。清掃活動のほか歩測大会なども行われる。

また当日は千葉県ウォーキング協会による第24回忠敬江戸入りフォーデウォークが富岡八幡宮にゴールインする。千葉県ウォーキング協会の連絡先は043-309-5606。

## 東京国立博物館で伊能図を展示

東京国立博物館本館1階15室（歴史の記録）で国の重要文化財に指定されている九州沿海図（大図で、合計21図からなる）から、

「九州沿海図 第一 小倉・下関」

「九州沿海図 第十 鹿児島」

が展示されている。期間は10月8日から12月1日（日）まで。

左の「九州沿海図 第十 鹿児島」は国立文化財機構所蔵品統合検索システムCoBaseからダウンロード。

15室では重要文化財の「中山道分間延絵図」も展示されている。これは伊能忠敬の測量と同時期に幕府の道中奉行所が五街道や主要脇街道を実測し、縮尺ほぼ1800分の1で作製したもので、本陣、問屋、高札、辻番、一里塚などまで描かれている。

## 伊能忠敬記念館の企画展

### 伊能図の再生

「国宝保存修理事業のあゆみ」

千葉県香取市の伊能忠敬記念館では平成23年度から国宝の保存修理事業を続けてきた。

この企画展では、修理過程で新たに得られた知見を中心に、伊能図が現在まで守り継がれてきた歩みの一端を紹介する。

昨年度は「琵琶湖図」の修復が行われた。装丁解体、本紙調査記録、膠による剥落止め、汚れ・しみ・付着物の部分的除去、作図当初の裏打ち以外の裏打ち紙の除去、欠損部分補紙、新規裏打ち、折れ伏せなどの修理が行われたとのことである。

期間は令和6年11月12日（火）から令和7年1月5日（日）まで。



九州沿海図 第十 鹿児島

## 会報バックナンバーあります！

会報バックナンバーの在庫があります。新入会員や執筆者、一般会員の皆さまからの注文に応じます。

ご自分の執筆者を地元の図書館等にご寄贈いただいて、伊能忠敬研究会の広報活動にご協力いただくと有り難いです。

ただし、在庫切れの号もありますので、あらかじめ事務局にメール等で在庫の有無をご確認ください。

- ・会員価格：一冊五百円（送料込み）
- ・入手方法：希望する号と冊数、氏名・郵便番号・住所を記し、事務局に申し込んでください。会報と代金振込書をお送りします。
- ・事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org)
- ・郵便振替口座  
00150-6-0728610

## 気軽に投稿を

伊能忠敬研究会会員は北海道から九州にまで広がっています。忠敬さんに関係した短歌・俳句・川柳、エッセイ、近況報告、行事報告など、ちょっとした気軽にご投稿いただき、相互交流のきっかけにしませんか！

ご投稿をお待ちしています。

・投稿先（電子メール添付の場合）

[kaiho@inoh-ken.org](mailto:kaiho@inoh-ken.org)

・手書きでも受け付けています。

## 『伊能忠敬研究』投稿要領

### ①原稿の長さ

論文・報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

\*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×3段または80字×4段）です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

### ②原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なPS形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

\*印刷サイズが100mm×75mmと350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによってCMモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

### ③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照）

### 送り先

・電子メール添付の場合 [kahno@inoh-ken.org](mailto:kahno@inoh-ken.org)

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

### ④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取っておいてください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

## 伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

（留守の場合は録音テープに吹込んでください。）

事務局メール [mail@inoh-ken.org](mailto:mail@inoh-ken.org)

郵便振替口座 〇〇一五〇六〇七二八六一〇

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

### 編集後記

◇酷暑とゲリラ雷雨の夏が終わった。◇異常気象が当たり前になってしまふのであろうか。◇原稿の集まりも夏バテ気味であった。◇利根川の支流の小野川が佐原の町を東側の本宿、西側の新宿に分ける。◇新宿が祭りの準備で落ち着かなくなる頃から原稿が集まり始めた。◇十月第二金・土・日が佐原新宿の鎮守諏訪神社の秋祭りである。◇氏子十四町内が山車を曳き廻す。◇文政8（1820）年には伊能忠敬の嫡孫である伊能忠誨が、江戸から来た桑原養純・秋庵兄弟と見物した祭礼である。◇もつとも編集子は本宿八坂神社の氏子なので、祭り囃子を遠くに聴きながら、104号の編集に専念した。◇編集する中で、嬉しいニュースと惜しまれるニュースが一緒に届いた。◇伊能忠敬笹山領探索の会の国土地理院長感謝状授与を伝える地元の新聞記事に、三月で解散したとあった。◇おめでとうございます。そして、これまで有り難うございました。（T生）

次号（第105号）は2025年2月発行、**原稿締切は12月31日**です。  
皆さまの投稿をお待ちしております。